# 転生魔導師　　フェアリーテイルへ

武士道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生魔導師　フェアリーテイルへ

【Ｎコード】
Ｎ０６３８Ｗ

【作者名】
武士道

【あらすじ】
オリ主最強とか苦手な人は読まないほうがいいです。
駄文です。そこんとこ、ヨロシク。

## 転生・・・めんどくさ（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 転生・・・めんどくさ

「おい・・・・これはどういうことだ？」

俺は、東堂　旋風〔とうどうつむじ〕いきなりだが、俺は今目の前のじじいが殺したくて仕方がない・・・何でかって？それは・・・・

「すまん・・・わしのせいで・・・君、死んじゃった」

「はぁ？」

「ちょやめて、わしを殺す気？」

「・・・・・」

俺は無言でじじいの顔面を殴っていた・・・・ほぼ、マウント状態である。

「それで・・・・何で俺は死んだんだ？」

「・・・・・「ふん！」分かった言うから、言うから！」

「さぁ、吐け」

「字が違うんだけど、まぁいいや。実は「実は？」わしが饅頭を食ってたら天国から落としちゃって・・・」

「その饅頭に当たって俺は死んだと？」

「うん「バキ！」イタ！」

俺はそのじじいにマウントを取り再びラッシュした。

「悪かった、悪かったってじゃから君に１つだけいいことをしてあげよう」

「いいこと？」

「そうじゃ・・・お主、転生してみんか？」
「転生ってよく聞く二次創作のあれか？」
「あれじゃ」

こいつマジかよ・・・大体こいつ何なんだ・・「わしは神様じゃよ」
マジかよ・・こいつ俺の心を読みやがったぞ

「いい話だが、断らせてもらうよ」
「！！何でじゃ？おいしい話じゃろう？「確かにそうだけど・・・
わけ分からん世界に飛ばされちゃたまんないからな」・・・・ちょ
マジお願い。わし、お前を転生させないと面子が・・・」

お前の面子かよ・・・俺の意思は？

「そうじゃ！お前の好きな力もやるから！」
「・・・・分かったよ。行くよ、それで何処に行くんだ？」
「うむ。世界はフェアリーテイルの世界のようじゃの」

フェアリーテイルか漫画持ってたから、安心だな

「分かった。能力は魔法を二つ使えるようにする事と、その二つし
か使えない代わりに俺の魔法を強く設定してくれ。」
「そんなんでよいのか？では、送るぞ？」
「あぁ頼む」
「それではの・・・楽しくやるんじゃよ」

すると、光に包まれて俺の意識は失った。

「うっここは・・・・」

次に俺が目を覚ますと、そこは砂浜だった。

## 転生・・・めんどくさ（後書き）

次回は主人公紹介です。

## 主人公設定（前書き）

主人公設定です。
まだ考え中なので、微妙な誤差がでると思います。

# 主人公設定

主人公　　東堂　旋風｛とうどうつむじ｝

前の世界では、普通の高校3年生だった。三ヶ月後の大学受験のため、本屋に参考書を買いに行こうとした所、何故か頭上から饅頭？（神様曰く）が落ちてきてそのまま死んでしまったという。
高校では、サッカー部に所属していて体力や足の速さには自信があるようだ。
性格としては、とにかく臆病であった。夜中に暗いまま寝れないというほどに。
しかし、臆病のくせに正義感は強く仲間思いである。生前は、死ぬという事はどういう事なのだろう？とよく考えていたそんな時に饅頭が落ちてきたのである。

主人公の魔法

魔法1　　『陣風（トレアー）』

強力な風の魔法、風で飛んだり斬ったり衝撃波を飛ばす事が出来る。特殊な能力としては、風が当たった物を風化させる事が出来る。この力は主人公の意思で操作できる。
ただし、生物にはこの風化能力は効かないが生物以外のものなら何でも風化させることが出来る。

魔法2　　『英雄（ヒーロー）』

肉体を強化する魔法。強化された肉体の強度は、魔道収束砲ジュピターを止めるほど。
今までのスピードや力が上がるだけではなく、動体視力なども上がる。
あまり使いすぎると、筋肉痛で動けなくなる。日々の鍛錬で、威力は上がる。

闘い方としては、未来の設定では刀などの武器をを使って攻撃したり、主に英雄を使って闘います。

格好は着物を着ていて、背中に槍を腰に刀を一本差しています。

この設定は主人公が原作に入るときの物です。
時代設定がナツ達が子供のときの話なので。

## 主人公設定（後書き）

もしかしたら、後から追加するかもしれません。

## 海での生活（前書き）

武士道です。
更新遅れてすいません。
応援よろしくおねがいします。

## 海での生活

「それにしても綺麗な海だな～」

俺が今見ているものは深い青色の海である。それが、今までに見た事もない位綺麗だったのだ。
しかし、今はそんな事をしている場合ではなく・・・

「そういえば、俺なんでこんなに小さくなってんの？」

俺が自分の体を見ると体が十歳位の体になっていた。

「はぁ～まぁいいか、それにしても俺本当にフェアリーテイルの世界に・・・・・あれ？」

何故だ？フェアリーテイルの世界に転生したことは分かるのに、フェアリーテイルの知識が重要な事しか思い出せない。人は・・・顔だけしか思いだせないか。

「あの神様、駄目駄目じゃん。まぁいいか」

俺は、辺りに村などが無さそうだったのでサバイバル生活をすることにした。
少し歩いていくと洞窟があったので、そこを拠点とした。
洞窟にしては、いろいろ利用が出来そうな物があったのでそれで火を起こした。

「さぁ～て、魚でも獲るかぁ」

俺はそこらへんの木の棒を石で研いで、海の中に入った。
海の中は見た事もない魚がたくさんいて驚きの連続だった。
そして、獲れた脂の乗った魚を焼いた。

「それにしても魔法ってどうつかうんだ？」

俺は先程獲った魚を焼いて食べていた。寝床の準備も草を敷いて補った。
温泉も奥のほうに沸いていたので充実している。
まぁそんなことは置いといて魔法の事である。

「どうすんだろ？こうかな？ふん！」

俺は手に力を入れてみたが、反応は無かった。

「・・・・・・まぁぼちぼちやるかぁ」

やる気のない声が洞窟の中で反響した。

「おっ？来た来た、フィッシュ！」

俺がこの世界に来て、早一週間。俺は自分の魔法を見つけることができた。
一つ目の魔法は陣風という魔法で飯を獲りにいった時偶然見つけた物だ。
二つ目の魔法は英雄と言ってこの前でかい岩を壊してぇと思い軽く殴ったら粉砕した。
しかし、その翌日筋肉痛に悩まされて後悔した。それからは、筋肉をつけるようにしている。

そんな俺は、今釣り真っ最中だ。

「いいね～今日は大当たりだ。今夜の晩飯は豪華に・・・・・ん？」

俺が砂浜を見ると、何か赤い何かがあった。俺は、使える物なら拾おうと思い釣りを中止して拾いに行った。しかし、それは物では無かった。

「人間じゃねぇか！？おい！大丈夫か？」

俺が抱きかかえて顔を見ると女の子であった。

しかも、着ている服が酷い。布切れを羽織らせたような姿である。

俺も人のことは言えないが。

俺の姿は気付いたときに来ていた着物だけである。しかし、最近はパンツだけだ。

これでは、俺が変態になってしまう・・・・・

「とりあえず、運ぶか・・・・意識も無い様だし」

俺は少女をおんぶして洞窟に運んだ。

「ふ～これで安心かな？」

俺が着いたのはすっかり夜である。

俺はそこらへんの薬草〔かもしれない〕物を使い自分の着物を羽織らせて寝かせた。

そんな俺がパンツ一丁で魚を焼いている。

「流石に夜は冷えるなぁ」

俺は身震いしながら魚を焼く。すると、

「誰？」

「おっ？起きたか？」

俺は、記憶が無かったので分からなかったが実はその少女が後のエルザ・スカーレットとは知らずに俺は接していた・・・・・・

## 海での生活（後書き）

はい。エルザ登場です。
次回は主人公の初戦闘です。
お楽しみに。

## 赤い髪の少女・・・・誰やねん？（前書き）

武士道です。
主人公はあまり原作に関わらないように行動します。

## 赤い髪の少女・・・・誰やねん？

「なぁお前の名前はなんてんだ？」
「・・・・・」
「無視ですか・・・・・」

俺はさっき調理した魚を赤い髪の少女に渡した。腹がすいていたのか俺の分まで食った。
それにしてもこの娘の目の傷は酷かったな、応急処置はしたがまず目は見えないだろう。
俺はそんな少女を不憫に思った。ところで、名前だ名前

「なぁ教えてくれてもいいだろ？」
「・・・・・エルザ」
「ん？もう一回」

俺はその娘が小さな声で話したので聞き取れなかった。

「・・・・エルザ・スカーレット」
「エルザ・スカーレットだな。うん、いい名前だ」

俺がそういうとエルザは少し恥ずかしそうな顔をした。
それにしても、本当に無口な子である。
まぁ治療の時に見たあの傷を見れば相当な事があったのだろう。

「ねぇ・・・」
「ん？何だ」
「貴方の名前は・・・」

俺の名前か・・・流石に日本語使うのは不味いんじゃね？まぁいいか名前だけなら。

「俺の名前はツムジ」
「ツムジだけ・・・・？」
「そう、ただのツムジだ」

俺がそういうとエルザはキョトンとした顔をした。
まるで、同じ境遇の人に出会ったような・・・

「じゃあ・・・私がつけてあげる」
「へぇそりゃうれしいね」
「・・・・・・・・」

滅茶苦茶考え込んでいるな・・・・思いつきでもいいのに。

「まぁ無茶するな、ゆっくり考えてくれ。」
「・・・・・うん」

俺はそういって眠った。

――――――――――――――――翌朝

「ん？もう朝か？」

俺は洞窟の穴から差し込む太陽の日差しで目が覚めた。
俺は眠い目をこすり、朝飯をとりに出かける準備をして砂浜でストレッチを開始した。
すると、洞窟から赤い髪の少女エルザが髪を寝癖だらけにしながら

出てきた。

「おいエルザ、髪やべぇぞ？」

「・・・・えっ？あっ・・・・」

今頃気付いたのか慌てて寝癖を直しに湧き水へと向かっていった。

俺はエルザが寝癖を直しに行っている間に魚を獲る事にした。

「あの・・・・」

「ん？どうした？」

「ありがとう・・・」

俺らは朝獲ってきた魚を焼いて食べていた、ほかにも近くにあるヤシの木みたいな物を割って食べさせた。何で割ったかって？それは手刀です（笑）

「気にすんな、困ったときはお互い様だ」

「・・・・・」

「俺に話したくない事もあるだろう。ぶっちゃけ俺はお前の過去には興味は無い・・・だから気にすんな」

「・・・・うん」

エルザは少し嬉しそうな顔をしながら食べていた。

笑ってれば可愛いのになぁ・・・・まったく、こんな風にした奴は何処のどいつだよ！

「それで？お前はこれからどうすんだ？」

「・・・・フェアリーテイルに行く」

「フェアリーテイル！？」

「知っているの？」

・・・・駄目だ。魔導師ギルドって事しか思いだせん・・・

「あぁ魔導師ギルドだろ？」
「うん、場所は分かるの？」
「生憎俺は知らん」
「・・・・・そう」

エルザは少し残念そうな顔をした。
そうだなぁそろそろ出てもいいかな？魔法も少しは慣れたし。
俺は少し悩んで決意をした。

「よし！それじゃあフェアリーテイルを探すか！」
「・・・えっ？」
「よし！そうと決まったら食料に飲料、寝具も持ってかねぇとな！」
「あっあの」
「何だ？」
「いいの・・・・？出会ったばっかりの赤の他人にそこまで」
「何だよ？もう俺達赤の他人じゃないだろ？もう俺達は友達なんだから」
「えっ・・・・」

エルザは信じられないと言わんばかりの表情だった。
そして、何故か泣き出した。俺は慌てて慰めた。

「おっおい、俺なんか悪い事したか？」
「・・・・・」

エルザは無言で首を横に振った、そして俺に抱きついてきてずっと泣いていた。

「はぁ～仕方ないか。出発は明後日だな・・・」

俺はその後は準備に集中した。途中でエルザも手伝ってくれた。

――――――――――――――二日後

「準備はいいか？エルザ？」

「うん・・ツムジ」

「へぇ初めて名前で呼んでくれたな？」

「・・・・友達だから」

「・・・・そうかい」

俺は少し満足して気になった事を喋った。

「そういえば、俺の名前はどうなったんだ？」

「・・・・・・」

まだ考え中のようだ。そういえばさっき思い出したんだが、この子あの妖精女王でした。

普通の子供だと考えていたよ・・・世の中奇想天外だなぁ

「ねぇ・・・ツムジ」

「ん？何だ？」

俺が上の空だった頃にエルザが話しかけてきた。

「重たくないの？」

「ん～？これか？大丈夫、俺の魔法があるから。」

「ツムジも魔法が使えるの？」
「あぁ。お前もか？」
俺が聞くとエルザは首を縦に振って答えた。
俺はエルザの分の荷物を背負っている。

「それじゃあ行くか？」
「うん！」

俺はエルザと手をつないで森を抜ける事にした。
恐らくこの向こうには町があるにちがいない。
俺が生活していた頃よくこの方向から煙が出ていたからな・・・
そんなこんなで歩いていると森の奥から光が見えてきた。
どうやら出口のようだ、俺達は出口に向かってゆっくりと歩を進めていった。

## 赤い髪の少女・・・・誰やねん？（後書き）

戦闘できなくてすいません。
次回こそ初戦闘です
みなさんよろしくね

## マグノリアへ（前書き）

武士道です。
更新遅れてスイマセン・・・・
主人公はなるべく原作に関わらないように行動する予定です。

## マグノリアへ

「へぇ～いろいろな物が置いてあるなぁ」
「うん」

俺達は今、森を抜けた先のある町に寄っていた今夜はここで宿を取るつもりだ。
それにしても活気のある町である。たくさんの人々が歩いていて人酔いしそうだった。
しかし、俺達のような子供に宿を貸してくれるだろうか？
俺がさっき道端で拾った財布を出すと何とか二人分の宿泊費にはなるであろう硬貨があった。
それにしても、周りの人たちの視線が痛い・・・・・おそらく俺の姿に驚いているのだろう。
なんせ十歳位の子供が巨大な荷物を背負っているのだから・・・・・
まぁこれも英雄のお陰なんだけどな。

「さてエルザ、宿を探そう」
「分かった」

少し歩くと少しぼろいが宿屋が見つかった。あそこなら料金も安そうだ・・・
俺がエルザを人ごみから飲み込まれないよう手をつないで店に入った。

「いらっしゃいって子供かよ」
「なぁじいさん。宿貸してくんねぇかな？」
「ふざけんな！何でお前らみたいな餓鬼に」

親父が怒鳴るとエルザが俺の後ろに隠れた。どうやら怖がっているようだ。

「じいさん。エルザが怖がってるから怒鳴らないでくれ。それに金ならある」

そういってさっき拾った財布を見せると

「お前、本当に子供か？子供にしてはしっかりしてるなぁ」
「そんなことより泊めてくれんの？くれねぇの？どっちだよ」
「分かった、泊めてやる。それとお代はいらねぇからな」
「はぁ？」
「お前らみたいな餓鬼から金取ったら俺が悪者みたいじゃねぇか！だからお代はいらねぇよ」

親父は以外に優しい奴だったらしい、俺はその事に感謝しながらエルザと一緒に自分達の部屋に入って言った。俺達はよほど疲れていたのか、そのままベットにはいって眠ってしまった。

――――――――――翌朝

「エルザ～準備は出来たか～？」
「うん」

俺とエルザはすぐに出かける準備をしていた。
宿屋の親父にフェアリーテイルの事を聞くとどうやらマグノリアという町にいるらしい。
しかもそこはここから余り遠くないとこにあり、この町の北の出口を真っ直ぐ進むと着くらしい。
親父が言うにはおよそ歩いて二日と言う所だ。

俺は、宿屋の親父に地図を書いてもらい出発する事にした。行く時にまた来いと言われた時は嬉しかった。

「よし、この森を抜ければ楽だな」

「うん」

俺とエルザは地図とにらめっこしながら歩いていた。
エルザはもうすぐ着くと分かった瞬間少しはしゃいでいる様に見えた。
先程の町、名前は『ボーディス』という名前で豊かな町だという事で有名だったらしい。
エルザは町に入った瞬間目をキラキラさせながら俺の服を掴んで来た、俺は着物だったので服が脱げるかとハラハラした。

「そろそろだな」

俺が地図を見ながら歩いていると目の前の地面に剣が刺さった。

「いっ！？」

俺がエルザを抱えて後ろに下がる、すると周りから十人位の人間が現れた。
十中八苦、盗賊だろう。俺はエルザを抱えて逃げようと思ったが、囲まれてしまった。

「にがさねぇぞ？ボウズ」
「くっ・・・」
「その荷物を俺にくれたら逃がしてもいいぜぇ」
「ふざけるな！誰がお前らなんかに！」
「ふん！糞餓鬼が・・・おめぇら！やっちまえ」

「「「「「おぉ！」」」」」

一気にリーダーを除く9人が襲ってきた。
俺は逃げようとしたが足が震えて動けなかった。
何とか体を倒して、一度の攻撃は避けたがエルザの手を離してしまった。

「エルザ！」

俺がそう叫ぶとエルザのところに盗賊が一人剣を持って斬りかかろうとしていた。

「やめろ！この野郎！」
「ぐへ！」

俺が英雄を使ってそいつを殴ると近くの木にまで吹っ飛んだ。
盗賊たちは俺の力をみて警戒しているようだ。

「この・・・図に乗るなよ！糞餓鬼」
「うわ！」

俺は盗賊の剣をかろうじてかわして、エルザの所にいった。

「エルザ、大丈夫か？」
「うん・・」
「よし、早く逃げるぞ！」

俺がそういって、逃げようとしたその時

「おらぁ！」

「ぐぅ・・・・」
「！！！ツムジ！？」
俺が油断をして英雄を解いていた時後ろにいた盗賊にカバンを貫通して背中を刺された、背中が熱い。
自分の血が出ているのが分かる。
エルザは俺の血を見て驚愕していた。
「くっそ・・・この野郎！」
「ぐへぇ！」
俺が回し蹴りを食らわして、そいつを吹っ飛ばした後エルザを抱えて森の出口まで全力で走った。
「！！待て！この野郎！」
盗賊のボスが追ってくるが、英雄を使った俺には追いつけない。
それが分かったのか奴らは火の魔法を放ってきた。
「くそ！・・・・イメージしろ。風のイメージを」
俺の魔法、陣風は風のイメージをすることで効果が上がる。戦闘中はイメージがし辛いので使えないのである。イメージした風なら大概の事なら出来た。
俺は風を盾のイメージをして魔力を込めた。
すると、目の前に風が吹き荒れ火の魔法をそのままあいつらに返した。
「！！どわぁ～アチチチ！」

俺は火達磨の盗賊をほっといて、走りに走った。

「ここが・・・・フェアリーテイル。」

「・・・・・・・」

マグノリアに着くと時間はちょうど夕方。

エルザはさっきの戦闘で俺の血をみて気絶してしまったようだ。

俺は、血が足りないせいで霞んできた目を我慢しながらギルドの中に入った。

すると、建物の奥から小柄な老人が出てきた。

「なんじゃね？君は？」

「たの・・・む・・この子をギルドに入れてやってくれ」

俺は血だらけの体のまま荷物を降ろし、エルザを床に寝かせて頼み込んだ。

「お主！どうしたんじゃ！？その傷は！？」

周りの連中も驚いている、だが今はそんな事はどうだっていい。

「頼む・・・こいつをギルドに」

「分かった、分かったからおぬしの方が重傷じゃろう！？」

「頼んだぞ・・・この子の事・・・・」

「おいお主！？リーダス、医者を呼んでくれ」

「うぃ」

俺は、薄れていく意識の中でどこかで見覚えのある顔を見た。

しかし、俺はそのまま意識を失ってしまった。

## マグノリアへ（後書き）

駄文でスイマセン。
主人公は自由気ままに生きさせるつもりです。

## 神様ファックユー！！（前書き）

どうも武士道です。
駄文ですがよろしくお願いします。

**神様ファックユー！！**

『ここは・・・』

俺は今、この世界に初めて来た時のあの海辺に立っていた。
確か俺はフェアリーテイルで気を失った筈だったんだが

『・・・・夢だな。早く目を覚ませ俺。』

すると何処かから変な声が聞こえた

『――――――――お～い旋風。』
『！！おいおい、まさか幽霊か？』

俺は速攻で南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と唱え始めた。
しかし、目の前に出てきたのはあの糞神様だった。

『・・・・・・・』
『久しぶりの再会なのに酷くね？』

俺は無言で糞爺を殴っていた。

『・・・・それで、何の用だよ？何か用事があってきたんじゃないのか？』
『ふむ、実は御主に伝えたい事が二つあってのう』
『伝えたい事？』
『そうじゃ・・・重要な事だからよく聞け』

爺はシリアスな雰囲気を持って話し出した。

『まず一つ目、お主の記憶について何じゃが』
『それは知っている、原作についてまったく思いだせん』
『おぬしの記憶は一応元に戻して置くようにしよう。続いて二つ目のことなんじゃが・・・・』

爺は困ったような顔をしていた。
話す事を戸惑っているようだ。

『実はのぅ。お主の他の転生者が来るかもしれん』
『はぁ？』
『ワシが転生させるのではなくて、閻魔の奴がのう』

まさか閻魔様まで出てくるとは、せっかく平和に過ごせると思ったのに・・・・闘いたくねぇなぁ
その後話を聞いていると、閻魔とこの爺はとても仲が悪いらしい。
閻魔は爺に嫌がらせするために、新しい転生者をこの平行世界に送るそうだ。
しかも、その転生者は複数の能力は無いものの１つの能力に特化させているらしい。
そして、その転生者が来る時間は八年後・・・原作開始の頃だ。

『話は分かった。そして、俺にどうしろと？』
『うむ、おぬしには別の平行世界に行ってもらう。』
『どういうことだ？』

糞爺は俺を別の平行世界に行かせ、俺の姿そっくりの神様の部下に迎え撃たせる考えのようだ。
転生者は１つの世界に一人だけらしい。もし、二人の転生者がいる場合は闘わなくてはいけない様だ。

そして、負けた者は・・・・どうなるかは分からないそうだ。

『もし俺が別の平行世界に行ったらこの世界の奴らはどうなるんだ？』

『・・・・お主のことは誰も覚えておらんじゃろう』

『・・・そうか。決めたぞ糞爺』

『何をじゃ？』

『俺はこの世界に留まる』

すると、神様は信じられないと言ってきたが俺の意思が変わらないのを見ると俺に追加の能力を付けてくれるそうだ。

『ありがたいが、俺にはいらない』

『何故じゃ！？このままだと死んでしまうぞ！』

『能力はいらない。変わりに才能をくれ』

『才能・・・？』

俺が頼んだ才能は武術の才能を貰った。ついでにこの世界の文字も読めるようにして貰った。

『旋風・・・・』

『何だよ？糞爺』

『すまないのう・・・わしのせいで』

『・・・・気にすんな。面倒ごとには慣れてる』

『あっそう！？よかったぁ～』

『一回死ね！この野郎！』

『ぎゃぁぁぁぁ！』

俺が殴っていると急に海から巨大な波が襲ってきて俺は波に飲み込まれてしまった。

その後、神様は満足そうな笑みをして呟いた。

『まったく、痣ができたらどうするんじゃ・・・それにしても、欲が無い奴じゃのう。まぁサービスを三つほど付けてやったがのう・・・・。幸せに暮らすんじゃぞい？東堂旋風・・・・』

そうして、神様は消えていった。

## 神様ファックユー！！（後書き）

正直、このまま書くか八年後まで飛ばすか迷っています・・・
次回もお楽しみに

## 無理矢理フェアリーテイルへ（前書き）

武士道です。
よろしくお願いします

## 無理矢理フェアリーテイルへ

「っっ！！」

俺が目を覚ますと見た事もない部屋に居た。おそらく、フェアリーテイルの中の部屋の１つだろう・・・
ふと俺が横を見るとエルザが俺のそばで寝ていた、俺の看病に疲れたのだろう。
俺が外を見ると夜中のようだった。俺はエルザが起きないようにこっそり出て散歩に出た。
動くと少々傷が痛んだが気にしないようにした。
外に出ると夜風が肌に染みた・・・・・
心地よい風だと俺が思っているといきなり声をかけられた。

「気分はどうかの？」
「！！何だ、じいさんか。驚かせないでくれよ・・・幽霊かと思ったじゃないか」
「わしはまだ死んでおらんぞ！？」
「はいはい、まぁ気分は上々だ。それと、俺の名前はツムジだ。」
「そうか、わしはマカロフ。このギルドのマスターじゃ」

俺はそうしてマカロフと挨拶を交わすと、再び聞いた。

「なぁ？じいさん」
「なんじゃ？」
「エルザの事なんだが・・・」
「わかっとるよ、あの子はちゃんとフェアリーテイルに入れた」
「そうか、ありがとう」

俺はそれを聞いて安心すると部屋に戻ろうとした。

「お主は入らんのか？」

「何にだ？」

「ギルドじゃよ」

「・・・・・・・」

このじじいは・・・・俺は危ない事が嫌いなんだっつの！

というわけで丁重にお断りしよう。

「生憎、俺は入る気は無い。それに、明日中に俺はこの町を出る」

「・・・・そうか。しかしのう・・・・」

じじいがその後とんでもない事を喋ってきた。

「お主の治療代何じゃが・・・・」

「！！！！そっそれいくらだ？」

俺は借りた物は返さなきゃ気がすまない性質なのである。

生前は返さなかった金や借りは１つもない。

あっでも、親友に借りてた金返すのまだだった。

でも、死んだら仕方ないよな？

「そうじゃのう・・・・」

ごくっ・・・・・・

俺は思わず息を飲む。

「１０万Ｊじゃ」

「じゅ・・・１０万Ｊ？」

高いのか？高いのか？それは！
俺は少し混乱して落ち着かせた。

「分かった。その金俺がきっちり返す」
「そうか、それじゃほれ」

とじじいは手を差し出してきた。
何だこれは・・・・

「何だ？」
「いいから手をだせい」
「ん？こうか？」

俺が手の甲を差し出すとじじいは俺の手のひらに何かを押し付けた。
俺が再び手の甲を見るとフェアリーテイルの紋章があった。

「いっ！？」
「わはははは！これで、お主もフェアリーテイルの一員じゃ！」
「てめぇ！最初からそのつもりで！？」
「まぁのう」

じじいはにや～と笑ってどや顔をした。

「・・・・金返したら抜けるからな！期間限定だぞ！」
「分かった分かった、それじゃようこそ！フェアリーテイルへ！」
「・・・おう。よろしくな、じいさん」

そうして、俺はフェアリーテイルに入る事になった。

――――――――翌日

「お前らぁ！今日からフェアリーテイルに入るツムジとエルザじゃ！仲良くするんじゃぞい」

「よろしく。」

「・・・・・」

俺達がじいさんからの紹介を受けて、俺が挨拶をしたがエルザが出来なかった。

そういえば、漫画でもこんな感じだったか？

「ほら、エルザ挨拶しなきゃだめだろう？」

「うっうん・・・・」

エルザが覚悟を決めて、挨拶をするとみんなも快く受け入れてくれた。

カウンターの方にはグレイやナツなどのメインキャラが集合していた。

俺はあまり危ない事は嫌いなのでなるべく関わらないようにしたが無理だった。

「おい！お前、俺と勝負しろ！」

「はぁ？」

いきなりの宣戦布告に俺は驚く。

「おい、俺は戦いは好きじゃな――――――」

「よし勝負だ！」

「・・・・はなしを聞けよ」

俺がマカロフを見ると右手をグッと固めていた。
はぁ・・・やだなぁ。闘うのは、まぁ試合だと思えばいいか。

「よし、分かった。やろう」
「おぉ！」
「ただし、表でな？」

俺達が外に出て試合？の準備体操をしていると、何故か観客が多かった。
中には、原作キャラの奴らやエルザまでもが見に来ていた。

「あいつ、勝てんのか？」
「う～ん、無理じゃない」

グレイとカナがこんな事を話していた。
酷い言われようである。

「おい！準備はいいか！？」
「ん？あぁいいぜ」
「いくぞ！」

そうして、俺達の試合？が始まった。

## 無理矢理フェアリーテイルへ（後書き）

次回も頑張ります。

## 初めてのお仕事（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 初めてのお仕事

「行くぞ！」

ナツが俺に向かって走ってくる、しかしそれ程速くない。
これなら、英雄を使うまでも無いようだ。

「おらぁ！」

ナツが拳を固めて殴ってくるが俺はそれが遅く感じられた。
・・・・そうか。あの時の盗賊との戦闘の感覚がまだ残っているのか
俺は、ナツの拳を頭を下げてかわして拳をナツの顎に喰らわせた。

「うがっ！？」

ナツは俺の拳をもろに喰らってふらふらの状態だった。

「くそっ！これならどうだ！」

ナツは大きく息を吸い込んだ。
まさか！？

「火竜の咆哮！」

俺はとっさに英雄を発動させ、手を前に交差させて防いだ。
そういえば、魔力の量が以前より上がっているような・・・

「なっ！どうやって防いだんだ？」
「危ねぇだろ！俺が魔法を使わなかったら確実に死んでたぞ」

「くっもう一回だ！」
「！！それは、勘弁してくれ！」
俺は英雄を使ってナツの懐に潜り込み腹を殴って気絶させた。
「おい！あの新人、ナツをやっつけちまったぞ！」
「グレイ、あの人勝っちゃったよ」
「マジかよ！？」
何やらギャラリーが騒がしい・・・・
すると、エルザが近づいてきて
「・・・おめでとう」
「おう。とりあえず、場所を変えるか」
俺は英雄を使ってエルザを抱えてギルドの中へ走っていった。
その後は、グレイやらラクサスから俺と勝負をしろといわれ対応に困った。
まぁ実際逃げたんだけどね？

――――――――――――――翌日

「はぁ・・・もう朝か」
俺は、最近朝が早い・・・何故かって？
そりゃエルザが俺から離れないから、一昨日も泊まり昨日も泊まった。
そろそろ一人で寝させて欲しい・・・・

「ほら、エルザ起きろ」
「ん？おはようツムジ」
俺はすぐに着替え朝食を貰いに行った。
俺が帰ってくると、エルザがフェアリーテイルの人に貰った服を着ていた。
悔しいが俺はその姿に見惚れていたのかもしれない。

「これが依頼書か～」
「うん」

エルザは俺が怪我で寝ていたあの日にギルドの説明を受けていたようだ。
今はエルザに教えて貰っている。
俺は、金を返さなければいけない為なるべく報酬金の高い仕事を探した。

「おっ？これならいいな」

俺がとった依頼書には『狼達をどうにかして下さい』と書かれていた。
報酬金は１２万Ｊ・・・・これなら借金も返せて旅の金も稼げて一石二鳥だな
少し怖いけど・・・・
俺はその依頼書をじじいに渡した

「ツムジ・・・お主大丈夫なのか？」
「何がだ？」
「この仕事は、うちのギルドの連中も二人も犠牲者になってるじゃ

ぞ」
「どうってことねぇよ、こんなもん」
俺がそういうと、じじいも諦めたらしくその代わりパートナーを連れて行くようにと言われた。
すると、エルザが俺の服を強く握り締めてきた。
「どうした？一緒に行きたいのか？」
「・・・・・・」
エルザは首を縦に振った、どうやら一緒に行きたいらしい。
すると、マカロフがそれならナツも連れて行けと言うので俺は仕方なく従った。

――――――――――数日後

「それで、狼達はあの森から来るんですね？」
「はい・・・そうです。もう村人も十人もやられています」
俺達は、依頼主のいる村にいた。
依頼主の話によると村の北側にある森から狼達が来るらしい。
その狼達を来ない様にしてほしいという事だ。
というわけで俺達はその森に向かっていた。
「なぁ～ツムジ～」
「何だよ？ナツ」
「飯にしようぜ～腹減っちまった」
「駄目だ、我慢しろ」
「何だよ～なぁお前もそう思うだろ？」

「うるさい、静かにしろ」
「何だとぉ！」
「こらっ！喧嘩すんな」

俺は、喧嘩を始めようとするエルザとナツをなだめる。
それにしても、エルザも初めて喋ったな・・・
出発するときもう少し話さなきゃな？っていったのが仇になったか

「おっ？ここか？」

俺が前を見るとでかい森があった。
どう見ても人間が住める環境ではない事が分かる。
だって、あんなでかい怪物がいるんだもの・・・・聞いてないよ？
こんな事

「よっしゃあ～燃えてきたぞ～」
「行こうツムジ」
「おっおう」

俺は震えるひざを押さえながら返事を返した。
すると森の奥のほうから・・・

『ガルルルルル』

と狼の声が聞こえた・・・
俺はびびりながら構えると十匹の狼が出てきた。
俺は心底心の中で思った。

『この仕事・・・・・・・選ばなきゃよかったな』

## 初めてのお仕事（後書き）

すいません。
少し時間設定をミスしました。

## 治療費返済！（前書き）

武士道です。
更新はなるべく早くしたいです。

**治療費返済！**

「よっしゃあ～暴れるぞ～」
「・・・・・・」
「・・・やる気満々だな。お前達」

ナツは拳を固め、エルザは無言で剣を出した。
そして、俺は――――――――――

「ツムジ・・・足震えてる」
「うっうるさい！これは武者震いだ」
「じゃあ行くよ」

ナツは一人で狼達と戦闘中というより暴れているだけだ。
エルザも剣を構え突っ込んでいった。
俺も英雄を発動して狼達に向かった。

『がう！』
「ぎゃあぁぁぁぁぁ！この野郎！」
『ギャワン』

俺はびびりつつも確実に狼を倒していった、計四匹と言った所か。
俺がエルザの方を見ると四匹位倒していた。
ナツは二匹、一番張り切っていたのにこの結果である。

「おいツムジ！何でお前が一番倒してんだよ！」
「それは・・・・実力？」
「いやまぐれだ」
「エルザ・・・・」

エルザの酷いつっこみは俺の心を痛めつけた。
何かエルザがどんどん原作に近いキャラになっているような・・・・・

「なぁツムジこれで全部か？」
「ん？あぁそうみたいだな」

周りを見るともう狼達の気配は無い。
どうやら初めての仕事は終わりらしい。

「それじゃ帰るか？」
「おう！」
「うん」

そして俺達は村に戻り報酬を貰った。
へっへっへっこれで借金？は返せるな・・・
と俺がほくそ笑んでいると

「お～いツムジ俺の分は？」
「私の分もだ」
「・・・・・は？」

そうかコンビを組んでいるから、三人で分けるのかって事は１２万Ｊ÷３＝四万Ｊ

「・・・・・・」
「ツムジ？」
「どうした～？」
「あのジジイいいいいい！」

それから俺達はギルドへと帰った。
その後すぐにジジイに文句を言いに言ったが潰されてしまった。

――――――――二年後

あれから二年、俺はあらゆる仕事をこなし腕を磨いた。
途中でジジイにS級にならんか？といわれたが断った。
魔法も完璧に使えるようになった。
そんな俺は今・・・・

「やっと・・・十万J溜まった」

俺が見ているのはでかい貯金箱。
ここには十万Jが入っている、早速これをジジイに渡しにいった。

「ほう、やっとか」
「うるせぇ、さっさと受け取ってくれ」
「分かった分かった、からかいがいの無い奴じゃのう」
「悪かったな」

俺が金を渡すとジジイが聞いてきた

「お前さん、これからどうするんじゃ？」
「もちろん出て行かせてもらう」
「そうか・・・・悲しくなるのう」
「日時は次の仕事を終わらせてからだ」
「分かった」

俺はその後部屋に戻り、以前から興味があった鍛冶屋の本を読んでいた。
フェアリーテイルを抜けたら鍛冶屋になるつもりである。
俺は読んでいた本を閉じ、抜けるときの準備をした。
準備といっても小さいリュックサック1つだ。

「そういえば次の仕事はと・・・・」

俺がさっきクエストボードからとってきたものを見ると鉱石発掘の仕事だった。
安全そうな仕事だろ？

「ツムジ！仕事に行くというのは本当か？」
「えっエルザ！？どうした急に」

エルザがいきなり扉を壊して入ってきた。
その扉誰が買い直すと思っているんだ・・・・

「また私を置いていこうとしただろう？」
「そっそんな訳ねぇだろ」

エルザは俺のそんな態度に不満があるようだったが、俺の後ろにある荷物を見て聞いてきた。

「ツムジ・・・何処かへ行くのか？」
「ん？これは仕事への準備だ」
「そうか、それならいいんだ」

エルザは安心したような顔をした。
もう最初に会った頃のエルザとは大違いである。

同じ人物であるとは到底思えない。

「そうと決まれば、行くぞツムジ！」

「おいエルザ引っ張るな！」

俺はエルザに引っ張られギルドへと降りていった。

そういえばいい忘れたことがある。

ミラ達がギルドへと入ってきたのだ。おかげでいつも騒がしい

それにハッピーも生まれてなおさらうるさくなった。

「エルザぁ！勝負だぁ！」

「ミラか・・・いいだろう」

言った傍から喧嘩を始める二人・・・あれでよくナツたちを注意できるよな

しかし早く仕事に行きたいので俺は二人の喧嘩を止めに入った。

「二人とももうやめろ」

「ツムジ、止めないでくれ！」

「そうだ！邪魔すんな！」

「いいからやめろ」

おれが二人の拳を英雄を使って止めるとマサカの事態が起こった。

「いいよ・・・・」

「へ？」

「お前からやってやる！ツムジ！」

「私もだ・・・」

「何でそうなんの！？」

ミラだけならともかく何故エルザまで？
俺はダッシュで逃げた・・・・・しかし

「「待てぇぇぇぇぇぇ！！」」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

・・・・・フェアリーテイルを抜ける日が遅れるかもな

## 治療費返済！（後書き）

駄文でスイマセン。
頑張ってよい文にするつもりです。

## 最後の仕事　前編（前書き）

武士道です。
過去編は回想で入れていくつもりです。

## 最後の仕事　前編

「ぜぇぜぇ・・・何なんだよ一体！」
「「待てぇぇぇぇ！ツムジぃぃぃぃ！」」
「のおおおおお！？」

俺はエルザ達に何故か追われていた。
現在の俺は英雄を使っていない・・・何故かって？
英雄を使い過ぎると後日の筋肉痛がハンパない・・・・っていうかあれは地獄の痛みである。
今は体を鍛えているおかげで使用できる時間や効果も上がったが、それでも度が過ぎると筋肉痛になる。

「ん？げっ・・・・・」

俺はいつの間にかに路地裏を走っていたようだ。
目の前は壁・・・いわゆる袋の鼠である。
するとエルザたちが不快な笑みをしながら歩いてきた。

「やっと追い詰めたぞ？」
「さぁ観念しろ？」

ミラは趣旨が変わっていて、エルザは既に剣を出していた。
・・・・俺が何かしましたか？

「なぁ何でこんな事になってるんだっけ？」
「はぁ？お前が私達の喧嘩を邪魔するからだろ？」
「いや・・・あれは当然だろう？女の子が拳骨で殴り合ってたら可愛い顔が台無しだぞ？」

「「！！かっ可愛い・・・・・？／／／／」」

するとエルザたちの顔が一気に赤くなった。
これだから餓鬼は・・・この内に俺は仕事に行くか
俺は英雄を使ってジャンプして屋根の裏に登った。

「それじゃあお二人さん、俺はこれで」
「「！！あっ！？待てツムジ」」

二人の声を聞こえない振りして俺は仕事へ向かった。

エルザ視点

「私と仕事に行く約束を・・・・」

いつもそうだ・・・何かしら私達をはぐらかして一人で仕事へ行く。
最近はギルドのみんなとの付き合いも悪いし、何かあったのだろうか？
私のために血を出しながらもフェアリーテイルに送ってくれたツムジ・・・もうあの時のツムジではないのだろうか？
私とも最近は一緒に仕事へ行ってくれない、私が仕事へ誘っても逃げる。
もしかしてツムジは私を嫌いになってしまったのだろうか？

「ツムジ・・・・」

私はジャンプしていった黒い髪と着物を着た男の子を眺めていた・・・・

ミラ視点

「あの野郎・・・・・・」

ツムジめ・・・・あの野郎会った時から何か掴めない男なんだよな

でも・・・・『可愛い顔が台無しだぞ？』

「／／／／／！！」

あの言葉を思い出したら顔が熱くなってきた・・・

・・・・あいつ、変な事言いやがって

私がエルザを見ると何か悲しい顔をしていた。

そういえばこの二人は一緒にギルドに来たってじいさんが言ってたっけ？

「ツムジ・・・・」

「エルザ、ツムジは何処に行ったんだ？」

「あぁ多分仕事へ行ったんだろう」

「仕事か・・・・どんなだ？」

「確か・・・鉱石採掘だったような」

鉱石採掘か・・・安全な仕事かな？まぁあいつらしいと言えばあいつらしいが・・・

「よし！あいつを追うぞ！」

「なっ！？」

「何驚いてんだよ？エルザは行きたくないのか？」

「いっ行くに決まっているだろう」

エルザは顔を赤らめて応えた・・・
もしかしてエルザはツムジの事を・・・？
そう考えると何故かイライラしてきた

「ちっ！」
「どうしたミラ？」
「何でもない！」
「？？？」

私は不機嫌になりながらもツムジを追うために走った。

「ここがボルコ鉱山かぁ・・・」

エルザたちが追って来ているのを知らずに俺は依頼主の居るボルコ鉱山のふもとの村へと到着した。
ここは山が近くにあるせいか資源が豊富で鍛冶屋もたくさん居るようだ。
ここに来た目的は金でもあるが、そのためだけに来たのではない。
ここに来たもう1つの理由はここで取れる良質な鉱石の事、その鉱石は薄く頑丈な鎧になると聞く。
そして、その鉱石を使ってエルザの鎧を作ってあげる事。
作り方は本やマグノリアの鍛冶屋のおっさんに聞いている。
エルザの今の鎧はボロボロだからギルドを抜ける最後の贈り物の材料を取るために来たのだ。

「それじゃあ頼んだよ？」
「分かりました。あの少し私が貰ってもよろしいでしょうか？」
「ん？あぁいいよ。どんどん持って行きなさい」

「ありがとうございます」

依頼主に会ってクエスト開始である。
目的の鉱石は気炎石、どんな効果があるかは分からないが珍しい鉱石である事は分かる。
俺は早速鉱石を掘りに行くために山へと向かった。
そう、エルザやミラがついてきている事も知らずに・・・・

## 最後の仕事　前編（後書き）

駄文でスイマセン。
話が長くなりそうです。

## 最後の仕事　中間（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 最後の仕事　中間

「ここか・・・・」

俺はボルコ鉱山の気炎石の採れる採掘場の所までやってきた。
依頼主の話だと最近ここら辺でドラゴン？的なものが出てきて鉱石が取れなくなったそうだ。
・・・・そんな事依頼書には書いてなかったなぁ

ポツポツ――――――――ザァァァァァァ！

急に雲行きが怪しくなり雨が降ってきた。
山の天気は急に変わるというが変わりすぎだろ・・・・
俺は雨宿りするために採掘場の穴で雨宿りをした。

「それにしても・・・・・・」

俺は降り注ぐ雨を見ながら呟いた。

「怖いなぁ・・・・・・」

正直膝がガクガクである・・・・
いや、違うからね？これは雨のせいで寒いから震えているだけだから！

ザァァァァァァ！

雨はまだ降り注ぐ・・・というよりさっきより強くなっている気がする。

それに風の流れがおかしい・・・・巨大な物体がすぐ近くにいるようだ。
雨のせいでよく見えないが確実に分かる・・・・・巨大な何かが

「グルルルルル――――――」
「！！・・・・・まじかよぉ」

俺は半泣きの状態で構えた。
俺は今素手の状態である、基本今は武器を使わない闘い方を俺はしている。
雨の中からドラゴン？の様な姿をした奴が出てきた。
大きさは大人三人分くらいの大きさである・・あれ？以外に小さい？

「本当にでたよ・・・・・」
「グルァ！」
「うぉ！？」

ドラゴン？は鋭い爪を俺に向けて振ってきた、俺はそれを陣風で空に飛んで交わした。
俺はすぐさま陣風で攻撃をしようとするが、不思議な事が起きていた。

「何故・・・飛ばない？」

そう俺はてっきり、ドラゴンなので飛んで俺を追撃してくると思った。
しかし、ドラゴン？は飛んでこない・・・と言うより飛べない感じだ。
よく見ると翼？的な物から赤い液体が出ていた、どうやら怪我をし

ているようである。

「お前・・・怪我してんのか・」

「グォォォォォ！」

「落ち着け・・・俺は敵じゃない」

俺は自分に向かってくる腕を英雄で受け止めた。

そして頭に手を乗せ撫でた・・・するとドラゴン？も分かってくれたようだ

「じっとしてろ・・・応急処置なら出来る」

「グォォォォォ・・・」

俺は手持ちの応急グッズで応急処置をした。

しかし、すぐには飛べないだろう

「これで大丈夫だ」

「グルルルルル」

「よせよ、感謝しなくてもいい。とりあえずあそこで雨宿りしよう」

「グォォ」

俺はドラゴン？と一緒に鉱石場へ向かった。

エルザ＆ミラ視点

「急に雨が強くなってきたぞ！」

「早く走れ！ミラ！」

「うるせぇ！お前の荷物が多すぎっから遅くなったんだろ！」

「何だと！？」

私達はツムジをおってボルコ鉱山までやってきた、しかし途中でツムジを見失ってしまい探していた所、雨が降って来た所だ

「おい！エルザ！あれを見ろ！」
「えっ・・・・」

ミラが指差す方向を見るとツムジらしき人物が巨大な何かに襲われていた様に見えた。
私はツムジ？を助けるために換装して剣を投げた、ミラはサタンソウル化し力の塊を発射した。

ドゴォーン！

「ガァァァァァ！？」
「何だ！？どうした！？」

俺がドラゴン？と一緒に居たらいきなりドラゴン？が悲鳴をあげた。
俺は急いで外を見ると雨のせいでよく見えないが魔導師らしき人物が二人いた。
俺は投げられた剣を見ると、エルザの剣によく似ていた・・・まさかな。

ザァァァァァ――――――――――――――サァァァァァ

雨がやんで来た、すると二人の魔導師が見えた。
あれは・・・・・
俺が見ると鎧に身を包んだ赤い髪の少女と、白い髪をした悪魔？が立っていた。

エルザとミラである。

「何で・・・・ここにいるんだ」
「ガァァァァ！」
「おい！？待て！？」

ドラゴンは真っ直ぐ敵に向かって突撃した・・・そう『敵』に
（エルザとミラが危ない！）
俺はそう思い英雄を使って走った。

「グオォォオオ！」
「なっ！？効いてないのか！？」
「マズイ！ミラ！」

ドラゴンは二人に向かって進む、もう怒りで我を失っている。
――――――――――――――――仕方ない

「もう駄目だ・・・」
「諦めるなミラ！」
「グオォォォオ！」

俺は走りながら陣風を使った、あいつらを守るために

『木枯らし――――――――』

俺はドラゴンを包み込むような巨大な風の渦を作った。
この渦は風の刃である、ふれれば例えドラゴンでも只ではすまない。

「！！ガァァァァァ！！」

ドラゴンは体中を切り裂かれ血しぶきを出しながら息絶えた・・・・・

そして・・・

サァァァァァ――――――――――

雨がやんだ・・・・

## 最後の仕事　中間（後書き）

すいません。
今回で終わらすつもりが終わりませんでした。
次で終わらすつもりです。

## 最後の仕事　後編（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 最後の仕事　後編

エルザ視点

「ガァァァァァァ！！」

私達を襲ってきたドラゴンはツムジが出した風の刃で倒れた・・・・

「すごい・・・・・」

私達が攻撃して弱っていたとはいえ、ドラゴンを一撃で倒すなんて・・・・

私はツムジに感動していた、ミラは少し驚いているようだ。

そうか、ミラはツムジのもう1つの魔法を知らなかったんだっけ？

すると、ミラがツムジに駆け寄っていた、私も行こう。

「ツムジ！すごいな、ドラゴンを一撃で仕留めるなんて」

「・・・・・・」

「あれ・・・？」

ミラが褒めているというのにツムジは嬉しそうではなかった、ドラゴンを一撃で仕留めたというのに・・・・・

私が見たツムジの顔はドラゴンの血しぶきのせいで、少し赤くなっていたが悲しそうな顔をしているように見えた。

「ツムジ・・・・？」

「・・・すまない。先にギルドに帰っていてくれないか？」

「何でだよ！私達も一緒に――――――――――――」

「頼む・・・・・」

ミラの言葉を遮ってツムジが放った言葉はとても勝利に喜んでいる言葉ではなかった。
それよりも怒り？のような感じが伝わっている。
私はミラの肩に手を置き、帰るように合図をした。

「・・・・分かった、でもギルドに帰ったら今度買い物に付き合ってくれよ」
「・・・あぁ、分かった」

ミラは満足げな顔をして背を向けて歩き出した。
いいなぁ・・・買い物、ってちがうちがう！

「ツムジ・・・・」
「何だ・・・？」
「大丈夫？」

私が聞くとツムジは苦笑しながら

「大丈夫だよ」

・・・・そんな顔じゃだませないよ。
ツムジの顔はとても暗かった、一体どうしたのだろう？
と疑問が浮かんだがあえて聞かないことにした。

「それじゃあ、行くね？」
「あぁ気をつけてな？」
「うん・・・」

私はミラと一緒に一足先にギルドへと向かった。

エルザ視点アウト

「・・・・ちくしょう」

エルザ達が行った後、俺は捨て台詞としか聞こえない事を言っていた。
ドラゴンを攻撃したエルザたちの事に言っているわけではない。
ドラゴンをこの手で殺した自分に腹が立っているのだ・・・・

（本当に殺さなければいけなかったのか？）

そう、あの時殺さずとも英雄（ヒーロー）で止めれば良かったのではないか？

「・・・・」

俺は無言でドラゴンのほうを見る、ドラゴンは青色の鱗に立派な爪や歯、角が生えていた。
むしろドラゴンというよりワイバーンに近い。

「・・・ごめんな」

俺は、償いを込めて謝った。
そこで、俺は考えた・・・・

「お前を、武器や防具に変えてやる。お前の体を余すことなく使うこと、これが俺から出来るせめてもの償いだ・・・」

俺は、腰からナイフを取り出してワイバーンの解体作業を始めた。

俺は、ワイバーンを食った。余すところ無く
食えるところ意外はすべて材料にした、俺は一旦村に下りてでかい
風呂敷を貰い材料を包んだ。

「はい。これが報酬ね」
「ありがとうございます」
「それと、これお目当ての鉱石」
「どうも」

俺は依頼主に仕事完了を伝えに村に戻った、そしていろいろな鉱石
を分けて貰った
っというより多すぎである。またでかい大きい荷物一つ増えた
中には明らかに珍しそうな鉱石もあった。

「あの～」
「ん？なんだい？」
「こんなに貰っていいんでしょうか？」
「いいのいいの、だってドラゴンを討伐しなさったんでしょ？」
「・・・・どうしてそれを？」
「さっきここを通った女の子達が言ってたよ」
「なるほど・・・・」

俺は話を聞いて、納得した。
もしかしたら、広がっちまうかもな・・・この話。

「ありがとうございました、それじゃあ」
「あいよ、また来な。いつでも歓迎してやるぜ」
「はい」

俺はそういって村を後にした、ともかくクエスト完了である。

俺は巨大な風呂敷二つを眺めた。
片方はドラゴンから剥ぎ取った材料、もう片方は貰い過ぎた鉱石の山
俺は英雄(ヒーロー)を使って運ぶようにした。
正直、筋肉痛が嫌だがワイバーンに失礼だと思ったので使った。

「ただいま」
「おう！かえったか、話は聞いておるぞ」
「ドラゴン・・・の事ですか」
「そうじゃ！その年でドラゴンを倒すなんて――――――――」
「あれはドラゴンじゃない！」

俺の怒声でギルドのみんなが静まった・・・・
エルザやミラなどの原作キャラも驚いている。

「すまない・・・・疲れたから寝るわ」

俺は荷物をギルドのスペースの広いところに置き、ワイバーンの材料を部屋に持って行って
ベッドに入って寝た。

俺は翌日は起きなかった。

## 最後の仕事　後編（後書き）

次回も更新頑張ります

## さよなら、フェアリーテイル　パート1（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## さよなら、フェアリーテイル　パート1

「ふわぁ～あ、今何時だ・・・？」

俺が時計を見ると既に昼過ぎになっていた。

俺はいつもの着物ではなく、ジーパンに軽いシャツを着てギルドに降りていった。

「あの～パン二つと適当にスープを1つお願い」

「分かりました」

俺はギルドで飯を注文すると、マカロフが変な顔で見てきた。

「何だよ・・・俺の顔に何かついてんのか？」

「いやのう・・・あれから三日も寝続けてやっと起きて初めて話した言葉がつまらなくてのう」

「はぁ？三日？一日の間違いだろ？じいさんとうとうボケたか？」

「ボケとんのはお前の方じゃ！おぬしはあれから三日も寝続けておったじゃろうが！」

「・・・・マジで？」

「マジじゃ」

俺が周りを見ると久しぶり！見たいな顔をしているギルドの奴らがいた。

俺ってそんなに寝てたのか・・・・予想以上に体を酷使しちまったのかな？

「それよりツムジ・・・」

「何だよ？」
「エルザに感謝するんじゃぞい」
「エルザに？」

俺が素っ頓狂な声を上げてじいさんに聞く
しかし、ちょうどそこにエルザがやってきた。

「ツムジ！！やっと起きたのか！？」

エルザは俺を見るとダッシュで俺に抱きついてきた。
俺は、どうしたらいいのかわからないのでとりあえず抱き返した。

「／／／／／／／／」
「・・・・・コホン」

マカロフが空咳をすると、エルザが今やっている事に気付いたのか
顔を赤くして離れた。

「あの・・・ツムジ？」
「何だ？」
「これから一緒に買い物に行かないか？いや！出来たらでいいんだ
が・・・・」

エルザはもじもじしながら聞いてくる

（はぁ・・・分かり易いな、まぁ俺も用事があるしまっいいか。）

「いいぞ」
「！！本当か！？本当だな！？」
「あぁ」

エルザは俺がそういうと、嬉しそうに笑った。昔のエルザを見ているかのようだった。
エルザは準備があるため巨大な荷物を一旦置いてくるそうだ。
エルザがダッシュで帰った後、じいさんが話してきた。

「エルザはのぅ・・・お主が寝ている間ずっと心配してたんじゃぞ？」
「何だと・・・？」
「あの娘は――――――――――」

――――――――――数日前

「マスター！」
「ん？どうしたんじゃいエルザ、慌てた顔して」
「ツムジが起きないんです」
「ど～せ、疲れたんじゃろ？寝させてあげなさい」
「でも・・・・」

エルザはどうもツムジの事が気にかかっておった。
挙句の果てにはツムジの隣に寝る始末・・・・
その話を聞いたミラはとんでもないオーラを出しておったがのう

「・・・・そんな事があったのか」
「そうじゃ、あの娘はずっとお主の事を心配しとったんじゃぞ」
「後でお礼をしなきゃな・・・」
「うむ！分かればよろしい」

「それじゃ行ってくるよ」
俺が入り口に向かって歩いている途中で
「ツムジ！」
「何だ」
「デート頑張るんじゃぞ？」
「・・・多分違うと思う」
そうして俺はエルザの待つフェアリーヒルズへと向かった。

ベキッ！
壁が壊れる音がする、その音を出した人物・・・
それは、一部始終を見ていたミラジェーンからだった。
「エルザ・・・・・コロス」
「ねっ姉ちゃん・・・」
「ミラ姉・・・」
兄弟に怖がれる姉、ミラジェーンは何か黒いオーラ？を出しながら
「エルザ・・・私が最初に約束したのに――――――――」
「抜け駆けはゆるさねぇからなぁ！！」

魔人ミラジェーンはツムジとエルザを追って走った。

向かう先はそう・・・・フェアリーヒルズ

## さよなら、フェアリーテイル　パート1（後書き）

駄文でスイマセン。
技名を考えているのですが中々思いつきません・・・・
そこで、読者の方にも主人公の技名を考えてもらいたいのです。
技名と言っても陣風（トレアー）のときの技名です。
どうぞよろしくお願いします

## さよなら、フェアリーテイル　パート2（前書き）

武士道です。
更新頑張ります

## さよなら、フェアリーテイル　パート2

「ここがフェアリーヒルズか、始めて来たな」

俺は今フェアリーヒルズの前に立っていた。
マカロフの話によるとエルザはここに住んでいるらしい。
俺は早速中に入ろうとすると、

「何やってんだい！あんたは！」
「！！なっ何だ？」

いきなり大声を上げて出てきたのは一人の婆さんだった。
どうやらここの管理人らしい

「まったく、ここは男子禁制だよ」
「そうなのか？すまん、知らなかったんだ」
「はぁ・・それで、ここに何のようだい？」
「あぁエルザを追って来たんだが」

俺がそういうと婆さんがニヤニヤし始めた。
・・・・何だこの婆

「お前さん、エルザちゃんのコレかい？」
「はぁ？んなわけねぇだろ、婆さんには俺がそう見えるのか？」
「違うのかい？」
「ただの腐れ縁の友達だよ」

俺が婆と話しているといきなり青い髪の女の子が近づいてきた、レヴィである

「何か用か、レヴィ？」
「あのね、エルザがもう少し待ってくれだって」
「おぉそうか」

俺はエルザの言うとおりに待つ事にした、そんなに準備が必要なのであろうか？
すると、婆が話しかけてきた。

「お前さん、名前は何ていうんだい？」
「ん？ツムジだよ、婆さんは？」
「あたしゃヒルダっていうんだ、それよりあんた」
「何だよ」
「あんたも危険な仕事に行くのかい？」
「まぁたまにな」

そういうと、ヒルダ婆さんは険しい顔をして話してきた。

「魔導師なんかやめちまいな」
「あぁそのつもりだよ」
「？？そうなのかい？」
「自分から危険な事に突っ込む奴は大概バカを見るもんだ」
「その通りだねぇ。あの子達も危険な仕事に行かなければいいのにねぇ」

ヒルダ婆さんはしみじみと俺に向かって言ってきた。
俺もその事に関しては同感だ、わざわざ危険な仕事に行かなくても安全な仕事を選べばいいものだ
特にレヴィの様な弱い魔導師なんか特にな・・・
その後、俺はヒルダ婆さんと意気投合して話していた。

すると

「つっツムジ・・・」

「ん？あぁエルザか準備はいいの――――――――――」

俺は言葉を失った、何時も鎧を着ていたエルザが可愛らしいワンピースを着てきた。

・・・気合入りすぎだろ

「どっどうしたんだ？その格好」

「いっいや、せっかく買い物に行くのだから私服を着なければと思ってな」

（お前、何時も鎧で買い物に行ってただろうが・・・・・）

俺は内心で突っ込みながらもあえて普通に接した。

「まぁ似合ってるぞ？」

「ほっ本当か！？」

「あっあぁ」

まぁ実際可愛いからな、そんな事より早く買い物行かなければ

「とりあえず行こうか？」

「そっそうだな！急ごう！――――――――――――――――――キャ！」

「・・・・・」

（動揺してるのが見え見えだぞ）

エルザは急いで歩いていたら、石に躓いて転んでしまった。

それも、結構強く転んだようで気絶していた。・・・やれやれ
俺はエルザをおんぶして買い物に向かった。

「ツムジ・・・」
「何だヒルダ婆さん？」
「エルザちゃんのこと頼んだよ？」
「・・・・任せろ」

俺はそうして商店街に向かってエルザをおんぶしながら足を進めた。

――――――――――その頃、ミラジェーンは・・・・

「ねっ姉ちゃん！？」
「ミラ姉！どうしたの！？」
「はっ・・・・・はは」

道端でこけて気絶していた・・・・・・

## さよなら、フェアリーテイル　パート2（後書き）

ミラとの会話はもう少し後にするつもりです。

フェアリーテイルを抜けるところが中々書けなくてすいません。

もうちょっと、長くなりそうです。

## さよなら、フェアリーテイル　パート3（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## さよなら、フェアリーテイル　パート3

――――――――――――マグノリア商店街

「やっと着いた・・・・」

フェアリーヒルズからエルザを背負ってきてやっと商店街に到着した。
英雄を使えば簡単だったのだが、こんな事で魔力を消費するのは嫌なので素の力で運んだ結果、超疲れた。
とりあえず、そこらへんの喫茶店に入る事にした。

「いらっしゃいませ～、二名様です――――――」

店に入ると店員の人が確認をとってくる、しかし途中で声を失ってしまった・・・
そうか、エルザの事でこうなってんのか

「大丈夫ですよ、少し眠っているだけです」
「そっそうですか、それではこちらです」

俺は店員に薦められた席についた、外の様子が見える窓側の席である。
店員はご注文が決まりましたらおよびくださいといって、行ってしまった。
俺はエルザを見る、エルザは俺の方に頭をかけている状態である。
まったく、黙っていれば可愛いのになぁと俺が思っていると

「うっここは・・・・？」

「起きたか？」
「つっツムジ！？一体どうして・・・・そうか、あの時」
「ここは商店街にある喫茶店だ、それより体は大丈夫か？」
「あっああ、別になんとも無い」
「そりゃよかった」

俺は安心して、店員を呼び注文する事にした。

「エルザは何か食うか？」
「わっ私は・・・」

どうやら決めかねているようだ、ここは俺が決めるか

「すいません、紅茶二つとショートケーキが一つ」
「かしこまりました」
「なっ！！」

俺が勝手に注文を決めるとエルザが何かいってきた。

「私に聞いていたのに何で勝手に決めるんだ！！」
「ん？ショートケーキはお前のもんだぞ？」
「え・・・？」
「あれ？お前、甘いもん好きじゃなかったか？」
「あぁそれはそうだが・・・」

エルザは話す事が無くなってしまったのか、黙ってしまった。
はぁ・・・
溜め息しかでねぇ

「あのなぁエルザ」

「なっ何だ？」
「俺が甘い物嫌いなの知ってるだろ？」
「あっ・・・・・・」
「・・・・・・」

（こいつ・・・絶対忘れてただろ）

俺が少々がっかりしていたら、注文していた物が来た。

「ツムジ？」
「何だ？」
「ツムジは食わなくて平気なのか？」
「あぁギルドで食ったから腹がいっぱいなんだよ」
「そうか・・・・！！美味いな、このケーキというのは！」
「お前・・・・はじめて食ったのか？」
「あぁしかし本当に美味いな」

つーことは、エルザがケーキ好きになったのって俺のせいってことになるのか・・・
恐らく、原作では違う過程だということになるだろうが
それにしても、ケーキを食っているときのエルザってこんな顔をするんだなぁ

「あま～い」

エルザはケーキを食うとき、俺でもドキッとしてしまうほどの笑みをする。
やっぱり、女は笑顔が一番だなぁと俺がしみじみ思っていると

「ツムジ、そろそろ出ようか？」

「ん？あぁそうだな」

勘定はたまたま財布がポケットにあったので俺が払った。
その後はいろいろ店を回った、そして最後の店に入っていた。
それは・・・・武器屋兼鍛冶屋の店である。

「うむ、やはりここの剣が一番使いやすい」
「ちょ、危ないから！」

エルザは置かれていた剣を素振りしていた、しかも狭い店内で
俺はエルザの素振りを交わしながら店主に会いに行った。
実は俺もここに用事があったのである。
フェアリーテイルに置かれていた鉱石が無くなっていたのだ、話に
よるとここの人が持って行ったらしい。

「おう！ツムジか！鉱石は運んでおいたぜ！」
「ありがとよ、親方」

実はこの人、見ず知らずの俺に工房をただで貸してくれるというと
ても親切な人
通称親方
今日はここの工房で以前からデザインしていたエルザの鎧を作るつ
もりなのだ。
鎧の名前は決まってある、その名も『天輪の鎧』御存知の通りあの
鎧である。
だが、俺は長年この世界にいたせいでせっかく甦った原作知識が忘
れかけてきたのである。

「エルザ、少し待っていてくれ」
「あぁ分かった」

俺は鎧を作るため工房へと向かった。

――――――――――その頃のミラジェーン

「・・・・・・」
「どうしたんじゃ？一体」
「実はあの後、フェアリーヒルズに行ったんだけどツムジたちが居なくて探しに行ったんだけど見つからなかったんだって」
「何じゃ、そんな事か。おい、ミラ元気ださんかい」

「・・・・・ツムジ」
「これは、重症じゃのう」
「ミラ姉」

（ツムジ・・・・早く帰ってきてくれ）

マカロフはそう心の中で叫んだ

## さよなら、フェアリーテイル　パート3（後書き）

おわれませんでした、フェアリーテイル編。
次回こそ終わらせて見せます。
応援よろしくお願いします。

## さよならフェアリーテイル　完成！天輪の鎧（前書き）

どうも武士道です。
やっとフェアリーテイル編完結です。

## さよならフェアリーテイル　完成！天輪の鎧

カーン、カーン
暗い部屋の一室で金属をたたく音が聞こえる・・・・
自称鍛冶屋のツムジは鎧を作りながら考えていた、

（この鎧が完成したら・・・・お別れだな）

俺は、最近の俺への評価に頭を悩ませていた。
あのワイバーンの件で俺の名前が有名になってしまったのである。
そんな俺についた異名が『妖精の風（フェアリーウィンド）』
妖精の風とは俺の魔法からついた名なのだろう、それにしても俺は有名にはなりたくなかった。
有名になれば俺の所在地や関係者、その他もろもろの情報が後に来る転生者にばれてしまう。
もちろん、魔法や戦闘スタイルなどもだ。
だから、俺はここら辺で引き際だと悟った。

「・・・・出来たか。」

俺は銀色に輝く鎧を見つめた、その鎧専用の剣も複数本作ってある。
この鎧に使った鉱石は気炎石、そうあの時の鉱石だ。
実はこの鉱石に至ってはよく分かってはいない。（笑）
それと、気付いた事がある。それは、この世界では魔水晶（ラクリマ）があまり普及していないという事だ。

「まぁ、考えるのは後でいいか。
それより、早くエルザに渡さなきゃな」

「ツムジ、出来たのか？」
「あぁ、今の俺の最高傑作だ」
「・・・・お前はたいした奴だよ。
ふらっとここに来て、勝手に俺の技術を見て盗んでいったんだからな」
「すまないな、勝手に盗んで・・・」
「いいって事よ」

本当に気のいい親方である。
俺は親方に御礼をして、鎧と剣を少し大きい箱に入れてエルザの元に向かった。

エルザ視点

「・・・・・遅い」

私はツムジに言われたとおりに待つ事二時間、一向にツムジは現れない。
せっかく、可愛い服を買ってきたのに。
ツムジはやっぱり私の事が嫌いなのだろうか。

「・・・・・ツムジ」

私は思わず彼の名を呟いてしまった
最近のツムジは何を考えているのか分からない。
私は不安で仕方なかった。
何故か、その内ツムジがパッと消えてしまいそうで・・・・

「お～いエルザ」

「ツムジ？」

私が考えているとツムジが巨大な箱を担ぎながら歩いてきた。

「ここら辺でいいかな」

俺はエルザを箱ごと担いで町外れの丘にまで来た。

時刻は既に夕方・・・・

「ツムジ、こんな所に連れてきて何をするつもりだ？」

「いや～お前にプレゼントをあげようと思ってな」

「プレゼント？？」

「あぁこれだ」

俺は、箱から天輪の鎧をあけて見せた。

「こっこれは・・・？」

「お前へのプレゼントだ。

あれから、三年もたつんだプレゼント位贈らせてくれ」

「あっありがとう・・・・／／／／」

「うんうん、お前はやっぱり笑顔が一番可愛いぞ？」

「／／／／／」

「くくくくくく」

「！！わっ笑うな！！」

俺は恥ずかしがるエルザを見ていたら思わず、笑ってしまった。

エルザは天輪の鎧と剣を換装する異空間へと転送した。

俺は換装の異空間に入れる瞬間を見た後、俺はエルザを陣風でフェアリーヒルズへと運んだ。

「さぁここでお別れだ」
「あぁ明日会おう」

エルザとフェアリーヒルズに送って帰ろうとした所

「ツムジ！！」
「ん？」

エルザが俺の後ろで叫んでいた

「私からもプレゼントがある」
「何だ？」
「お前は今日からツムジ・ウィンドルだ！！」
「それは・・・あの時の約束か？
はっ！お前って奴は・・・・・」

あの時の約束をまだ覚えていたのか・・・・
この娘とももうお別れだと思うと悲しくなった。
俺は気付いたら目から涙が出ていた。
そして、俺がエルザにお礼を言おうとした瞬間

――――――――――――――――――――ズブ

「グッ！？」

俺が見ると、俺の腹に黒い槍が刺さっていた。
エルザは俺の異常に気付いたのか俺に向かって走ってきた。

「こ・・・の・・・」

俺は英雄を使い犯人の手を掴んで槍を抜き、右手でそいつの首を絞めた。

「ぐっ！

・・・・貴様、効いてないのか！？」

「効いてるに決まってんだろ？

さっきから腹がズキズキ痛むし、目も霞んできてる」

「そうかよ！！

それじゃあ死――――――――――」

俺は、攻撃される直前にそいつの首の骨を折った。

ゴキッという触感が俺に伝わってきた。

「く・・・・そ・・・・・」

血が足りない、何とか英雄で止血は出来ているが血を出しすぎた。

「ツムジ！？大丈夫か！？」

エルザが何か喋るが俺は返す事ができなかった。

1つだけいった言葉が

「エルザ・・・・・元気でやれよ？」

「ツムジ？ツムジ、また冗談なのだろ？

・・・・・ツムジ！！」

エルザは俺の反応が無いのを見ると、助けを呼ぶためにギルドへ走

っていったようだ。

「ごほっ！
今なら・・・・まだ動ける。」

俺は陣風を使い風で体を浮かせた、フェアリーテイルの近くまで飛んで俺の部屋からすべての荷物を風で運んだ。

「早く・・・・治療しなきゃな
向かう先はどうすっかなぁ」

俺はノリで向かう先を決めてそこに向かった。

## さよならフェアリーテイル　完成！天輪の鎧（後書き）

一応フェアリーテイル編終了です。
細かい過去は回想みたいな感じで出していきます。
応援よろしくお願いします。

## 東の森にて・・・・（前書き）

武士道です。
近いうちに内容を補正しますのでご覧いただけるとたすかります。

**東の森にて・・・・**

ヒュウウウウ――――――――――――――

冷たい夜風が俺の体を撫でる。

「そういやぁ・・・

ギルドに入った事に気付いたときもこんな感じの夜だっけな」

俺が空を見ると綺麗な三日月が出ていた。

（空だけは俺の世界と変わらないなぁ）

俺は怪我をしているにも関わらず綺麗な三日月に見惚れていた。

そんな事をしている場合じゃないなと気付き俺はなるべく人気の無い場所へと向かった。

「ここら辺なら・・・・」

俺が着いた場所は鬱蒼と茂る森、確か爺さんは東の森って言ってったけ？

「・・・やばいな。

もう魔力が・・・・・」

そういった瞬間、俺の魔力が切れた。

魔力が切れて、体の傷が開き陣風も解けて俺は荷物と一緒に落ちた。

ポーリュシカ視点

ヒュゥゥゥゥゥ――――――――

「嫌な風だね・・・」

私は不吉な風だと思いながらさっさと家に入ろうとした。
すると・・・・

ドォォォォォォン！！

私の後ろに何かが落ちた。

「一体何事だい！？
・・・・・これは」

私が見たのは十代くらいの黒い髪で変な服を着た男の子。
その下には巨大な袋と中くらいのサイズのリュックサック
男の子は巨大な袋のお陰で怪我はしなかったようだ。

「！！
一体何なんだい？この傷は・・・」

男の子は腹に傷と言うより穴が開いていた。

（おそらくこれは槍に貫かれたんだろうね）

しかし、これほどの怪我なのに意外と出血は少ない。
「これなら助かるかもしれないね」
私は男の子を自分の部屋に連れて行き治療を開始した。

「うっ・・・ん？ここは？」
俺が目を覚ますと見慣れない部屋に居た。
「目が覚めたかい？」
「ん？
ギャアアァァァァ！！モンスター！！」
「・・・・・・」
「痛い、痛い、痛いって！
冗談だって！俺が悪かった！」
俺が冗談を言うと婆は俺の傷口を杖で突いて来やがった。
あれ？でもこの婆何処かで・・・・？

「それより、あんた。今はどんな気分だい？」
「気分？あぁすこぶる快調だ」
「そうかい、あんたフェアリーテイルの魔道士だね？
その内迎えが来るから待ってな」
「は？迎え？誰が？」
「マカロフが。」

（マジかよ・・・俺のフェアリーテイル怪我したからこっそり抜けちゃおう！！作戦が）

俺が打ちひしがれていると俺はイイことを思いついた。

「なぁ婆さん、俺をこのまま死んだって事にしてくれねぇかな？」
「はぁ？何言ってんだい、もうマカロフには元気だから迎えに来いって言っちまったよ」
「そこを何とか！！
急に病状が悪化したって言って死んだって事にしてくれ！！」
「・・・・・何か訳ありかい」
「まぁそうだ」
俺が素っ気なく答えると婆さんは仕方無さそうに了承してくれてた。
――――――――――イエス！！

マカロフ視点

「まさか、生きとったとはのう。
エルザの話を聞いた限りでは死んだと思っておったんじゃが・・・・」
ワシはツムジを迎えに東の森のポーリュシカの家に向かっておった。
ツムジが生きている事はエルザやミラには言っておらんかった。
後で驚かせようと思っての

ワシが東の森に着くとポーリュシカが待っておった。
わしはどうかしたのかと思い声をかけると驚愕の事実を言われた。

「ふぅ～どうやら騙せた様だな」

俺は空から二人の様子を見ていた。

爺さんやフェアリーテイルの奴らには悪い事をしたが、これでいいんだ。

俺といたら転生者同士の戦いに巻き込んでしまう。

あいつらと転生者が戦ったら傷つくのはあいつらだ、俺はそんな物見たくない。

まぁ婆さんにはお礼を言っといたし俺はこれでずらかるとするかな。

俺は、そのまま荷物を持って飛んでいった。

## 東の森にて・・・・（後書き）

次回からいきなり原作開始まで時間が飛びます。
最初はオリジナル展開にするつもりです。
どうぞよろしく。

## 六年後・・・・（前書き）

武士道です。
駄文ですがよろしくお願いします。

**六年後・・・・**

カーン、カーン――――――

ここは、マグノリアの近くの森に建てられている一軒家。
そこは、最近有名になってきた鍛冶屋ヴェル・ウィンドルの工房である。
そんな所に一人の女性が入っていった。

「ツムジ？いる？」
「おい、本名を出すなセシール。」
「ごめんごめん」

あれから六年、いろんな事があったが大まかな出来事を説明していこう。
まず、この綺麗な水色のロングヘアーの髪の女性の名前はセシール・オルベール。
年齢は俺の一個上、つまり２０歳ということだ。
俺がここに住み始めてすぐの頃に近くの村が闇ギルドに襲われていたので助けた所この女性と出会った。
それ以来、俺の常連さんという事になっている。
たまには、家事も手伝ってもらっているほどで一般の人から見ればほとんど夫婦状態である。
とても、世話好きで何かと俺の事を気遣ってくれる人物だ。
あれから六年、俺は原作に出てくるほとんどの鎧は作った。
今は、自分が考えていた武器を試しに打っているところである。

「それで、一体何のようだ？」
「まったく、無愛想な返し方ね。まぁいいわ、とりあえずこれ見て」

「ん？これは・・・・」

俺が見た物とは今日の新聞、記事には『ハルジオンの港壊滅！？』と書かれていた。

（・・・・ナツか。始まったのか、原作が・・）

俺は心の中でそう思いながら、新聞をセシールに返した。

「面白いよね～フェアリーテイル」

「そうか？」

「あんたも金鎚ばっか振ってないでギルドに入ったら？」

「・・・・・俺はギルドへは入らん」

「あっそう。それより、はい。」

「何だこれは？」

俺が受け取った紙は手紙のようだった。それも二通もある。

「分からないわよ、ポストに入ってたのを見たから持ってきただけ」

「そうか、サンキューな」

「あんたもたまにはポストを確認しなさいよ？」

「はいはい、分かりましたよ」

「もう、本当に分かってんの？

私はもう用事があるから帰るけどちゃんとするのよ？」

「分かった分かった、お前は俺の姉ちゃんか」

「姉・・・・それもいいわねぇ」

とうっとりし始めるセシール、おいおい冗談に聞こえないんだが・・・・

「ふむふむ、1つは評議員からか・・・・
さて、もう1つはと・・・・げっ」

セシールが行った後、俺は渡された手紙を読んでいた。
1つは評議員からの手紙で俺と話がしたいと書かれていた。近々、俺の家に来るらしい。
もう1つは・・・・何とエルザからだった。
ヴェル・ウィンドルがツムジだとは気付いてはいないらしく、ただ単純にこう書いてあった。

『私に鎧を作っては頂けないだろうが？』

「えぇ～～」

思わず声が出てしまった、そりゃそうだろ？
転生者との戦闘が終わり次第フェアリーテイルに戻るつもりだったからだ、こんなに早くばれてしまってはつまらないし、あいつらが危なくなってしまう。
手紙によると、我が家に来るらしい。それも、今日だ。

「ふっ・・・安心しろ俺。
俺の家を知っているのはこの辺の村人の中でも限られてくる。例えば・・・セシール」

その名前を言った瞬間俺は顔が青ざめた、なぜならあいつはとても口が軽いからだ。
この前も俺の内緒ごとをばらしやがった、あっ思い出したらムカつ

いてきたよ？

チャリン、チャリン――――――――――

俺の店の呼び鈴がなった、お客さんだ。
俺は何時も町に出かける時につけている、ミストガンも付けているフードのような物に手ぬぐいを頭に巻きつけて出た。

「はいよ～どちらさ――――――――――」
「ん？あなたが、あの有名な鍛冶屋ヴェル・ウィンドルか？」
そこに居たのは緋色の髪の女性、妖精の尻尾（フェアリーテイル）の妖精女王と言われているエルザ・スカーレットだった。

## 六年後・・・・（後書き）

はい、オリキャラ登場です。
今回は文字数少なくてスイマセン。
主人公は何だかんだで原作に関わっていく感じです。
それではまた今度。

## 鎧を届けまＳＨＯＷ！！（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

主人公の家は玄関が店で奥に工房、寝室、台所、トイレなどがある家です。
風呂は温泉で、食料調達は近く池で獲ったりセシールにおすそ分けしてもらっています。

## 鎧を届けまＳＨＯＷ！！

「・・・・・・」

俺の目の前に居る女性、それはエルザだった。
そんなエルザだったが今何をしているかとゆうと

「ほう、これはいい剣だな？流石はヴェル殿」

俺の店に置いてある武具を見物していた。

「いや、俺なんかまだまだですよ。それより、鎧を作って欲しいという事でしたが？」
「あぁそうなんだ、私がいつも買っている鍛冶屋の鎧がすぐ壊れる欠陥品でな？
　そこで、町に売ってあったあなたの鎧を着けてみたら妙に馴染んだので私専用の鎧を作って貰おうと思ってここに来たのだ」
「そうですか、それでどんな鎧がよろしいので？」
「そうだな・・・・」

エルザは頭を抱えて悩んでいた、俺はとりあえず椅子と茶、お茶請けを出した。

「まぁどうぞ、ゆっくり考えてください。俺は工房で片づけをしてますんで」
「あ、あぁすまないな」

ふぅ、とりあえず片付けに向かうか。
俺は、店を後にして工房へ向かった。

「よっと、よしこれで片付け終わったな」
俺は今ちょうど工房を片付け終わった頃だった。
時刻は昼時、そろそろエルザも決まっただろ・・・・
俺はそう思いエルザのいる玄関もとい店に向かった。

「・・・・・」
「うわぁお、まだ悩んでるよ・・・・」

俺が店に向かうとエルザが頭を抱えながらお茶請けに出した煎餅を食べていた。
俺はこのままだと仕方ないので、声をかけることにした。

「おい、そろそろ終わったか？」
「！！
何だ、ヴェル殿かびっくりさせないでくれ」
「別に驚かせようとはしていないんだが・・・・
それより、注文は決まったかな？」
「あ、あぁ自身の回復を出来る鎧などはないか？」
「自身の回復・・・・？」

それなら、あの鎧がいいかな？
この前、知り合いの鍛冶屋に貰った神療石で作った、療帝の鎧がいいだろう。

「少し待っててくれ」

「あぁ分かった」

俺は療帝の鎧を取りに工房へと向かい、療帝の鎧を取ってきた。

「これは療帝の鎧という物だ」

「ほう、それで効果は？」

「この鎧に使われている鉱石は神療石という石でな？

この石は生物の細胞を活発にさせる効果がある、その特性を利用して自己治癒能力の強化を施した鎧だ。世の中に1つしかない鎧で、防御力は俺が作った炎帝の鎧並みにあるし攻撃力もそこそこある。まぁあまり戦闘向きの鎧ではないが、君なら使えるかもしれない」

「そんな鎧を頂いてもよいのか？」

「構わないさ、使われたほうがこの鎧にとっても幸せだろうしな」

「そうか、それではお代は？」

「金は要らない」

「えっ・・・？」

エルザは驚いたようで少し動揺しているようだ、まぁそりゃそうか。

「お代はいらないが、その代わり質問がある」

「ほう、その質問とは？」

「お前は何のために剣を振るい、何のために鎧を着ける？」

「えっ・・・・・」

エルザはそのまま固まってしまった。

そうだよな、あの日と同じ質問だもんな？

俺はエルザの答えを待った。

エルザ視点

この男、只者ではないな。
私はこの店の店主である鍛冶屋のヴェルを見ていた。
あの佇まいに、喋り方、まるで六年前に死んだツムジを見ているようだ。

（・・・・ふっ、まさかな）

私は、そんな訳無いかと鼻で笑いヴェルの鎧の説明を聞いた後ある質問をされた。

「お前は何のために剣を振るい、何で鎧を着ける？」
「えっ――――――――――――？」

私は驚いた、七年前のツムジと同じ質問を受けたからだ――――――――

『なぁエルザ？』
『何だ、ツムジ？』
『お前は何のために剣を振るって何のために鎧を着るんだ？』
『決まってる、剣は相手を倒すために鎧は自分を守るためにあるんだ』
『確かにそれもあるが、他にもあるんだ・・・』
『え・・・・・・？』

・・・・そうだ、あの時のツムジはこういったんだ。

「『剣は大切な物を守るために振るい、鎧は誰かを身を挺して守るためにあるんだ。』」

「・・・・・・」

私はあの時ツムジに言われたことを思い出しながら復唱した。
その答えを黙って聞いていたヴェルは顔は見えないが何故か嬉しそうに見えた。

「・・・・合格だ。」
「本当か！？」
「あぁパーフェクトだ。だけどな？エルザ・スカーレット」
「何だ？」
「武器を持つ以上、誰かを傷つける事は覚悟しなければならない。そこんとこ、分かるな？」
「あぁ分かっている。」

それを聞いたヴェルは療帝の鎧を素早く箱に詰めて担いだ。
何をしているんだろう・・・・？

「よし、それじゃあ行こうか？」
「どっ何処にだ？」
「は？フェアリーテイルに決まってるだろ？」
「何故そうなるんだ！？」
「まぁ用事があるんだわ」

そういってヴェルはそそくさと走っていってしまった。

「お、おい！！待て！！」

私はヴェルを追いかけるために走った。

## 鎧を届けまＳＨＯＷ！！（後書き）

次回は再びフェアリーテイルが舞台です。
鉄の森（アイゼンヴァルド）編が入ります。

## 久しぶりのフェアリーテイル（前書き）

武士道です。
少しオリジナル展開入ります。

## 久しぶりのフェアリーテイル

「到着～」

俺がマグノリアに着くとエルザが後から息切れを起こしながらついてきた。

「何だ？へばったのか？妖精女王（ティターニア）」

「ふん！！そんな訳無いだろう？この位・・・あれ？」

見るとエルザの体が随分疲れているのか、プルプルいってた。

・・・・・ぷっ

「仕方ない、ほら」

「な、何をする！？」

「そこに乗ってろ」

俺はエルザを英雄で持って荷物の上に乗せた。

そして、そのままフェアリーテイルに向かった。

「おい、着いたぞ？」

「そ、そうか礼を言う、着いてきてくれ」

「分かった。」

俺はエルザに着いていってフェアリーテイルに入った。

「何だ、何だ？」
「あのエルザが誰か連れてきてるぞ？」
フェアリーテイルに入るとギャラリーがとてもうるさかった。
エルザにそのまま着いていくとあのジジイが座っていた。
「マスター只今帰りました」
「うむ、どうじゃった？ヴェル・ウィンドルと言う鍛冶屋は？」
「はい、只者ではない事は分かりました。
その事で実は・・・・」
「む？どうしたのかの？」
「本人がここに来ているんです」
「なんじゃと！？」
何やら、エルザとジジイが話し合っていた。
俺はそれを店で売っていた、スープを飲みながら聞いていた。
スープの御代を払った俺はジジイに話があるためじじいに会いに言った。

マカロフ視点

エルザの話を一通り聞いたわしはその噂の鍛冶屋を見た。
頭にバンダナを巻き、顔を布で隠している男確かに只者ではない感じがする。
すると、その男がわしに話しかけてきた。
「おい爺さん、少し話があるからあの部屋で話をしないか？」
その男が指差した部屋はかつて六年前に死んだツムジの部屋じゃっ

た。
それを、聞いたエルザはいきなり大声で怒鳴った。
「おい！！流石にそれは許さんぞ！！」
とエルザは男に剣を突きつけた。
「騒ぐなよ、ただ話をするだけじゃないか？」
「貴様・・・・・」
「よいのじゃ、エルザ」
「しかし・・・いえ、マスターが決定した事ならそれでいいでしょう」
そういってエルザは何処かに行ってしまった。
「それじゃ、行こうかの？」
「おう」
ワシ等はツムジの部屋に向かった。
「それで、話とは何じゃ？」
「あぁその事なんだが・・・・」
と男はツムジの持っていた品物の中で唯一残っていた鍛冶屋の本を掴んだ。
「お主！！それから、手を離さぬか！！」
ワシは思い切り男に怒鳴った。

「おいおい、俺の物に俺が触って何が悪いんだよ？」
「なん・・・じゃと」

ワシがそういうと、男はバンダナと顔にしている布を取った。
そこには、六年前に死んだはずのあやつが立っておった。

マカロフ視点終了

「久しぶりだな？ジジイ？」
「つ、ツムジ？お、お主何で・・・・」

俺がそういうとジジイは相当驚いていた。

「まぁそれは置いといてここに来たのは依頼とこの本についてだ」
「依頼？いやいや、それより何でお主は生きておるんじゃ？
ポーリュシカの話では病状が悪化して死んだって」
「成る程、あの人ちゃんとやってくれたようだな？」
「何じゃと・・・・？」
「まぁ説明してやるよ、何故死んだフリをしたかをな？」

俺はその後ジジイにすべてを話した。
といっても転生者の話は詳しくはしてないんだけどな？

「成る程の～それで、死を偽ったと・・・・」
「まぁすまなかったな、これしか方法は無かったんだ」

俺がそういうとじじいは渋い顔をしていった。

「それよりお主、その後から来る奴を一人で倒すのか？」
「あぁそのつもりだ」
「何故ワシらに助けを求めん」
「お前らじゃ絶対適わないからだよ、お前らが束になってかかろうが絶対に勝てない」
「やってみないと分からんじゃろ？」

とじじいは馬鹿なことを聞いてくる、適うわけねぇだろ
俺一人でさえ危ないかもしれないのに・・・・・

「とにかく、そういうことだ。
後、この本持っていっていいか？」
「それは駄目じゃ」
「それまたどうして？」
「エルザがいつもお前のその本を眺めているんじゃよ・・・・・
なぁツムジよ。フェアリーテイルに帰ってはこんのか？」
「使命が終わったら必ず戻る、絶対だ。
それと、エルザたちには言うなよ？まだな・・・・」

そういって、俺はバンダナと布を着けてギルドのクエストボードに依頼を張って家に帰った。

マカロフ視点

「まったく、変わらんのぅ」

ワシは歩いていくツムジを見ながら、思っていた。

「本当に昔から何を考えているのか分からんかったが、あやつなりに苦労して出した答えなんじゃろうな。
なら、ワシはその答えに報いなければなるまい。」

ワシはそう決意を固めた、そんな矢先にエルザが来た。

「マスター、一体何を話していたのですか？」
「！！　な、何でもなかったぞい？」
「そうですか・・・・」

エルザは不機嫌な様子で帰っていった。

（すまぬのぅツムジ、約束守れそうにないわい・・・・）

マカロフは知らない、ツムジはこの後そう遅くない未来に新しい転生者と戦うことを・・・・

## 久しぶりのフェアリーテイル（後書き）

武士道です。
新しい転生者は幽鬼の支配者編で入れる予定です。
それと、鉄の森編は入れませんでしたすいません。
次回こそ書きます。

## 鉄の森現る！！（前書き）

武士道です。
鉄の森編入れてよかったです。
他の作品も頑張って書くのでよろしくお願いします。

## 鉄の森現る！！

チュン、チュン、チュン――――――――

朝の日差しが窓から、寝ている俺の顔に当たった。
俺は眩しくて目を覚ました。

「う～ちくしょう、もう朝かよ・・・・」

俺は眠い目を擦りながら目覚ましのために外に出た。
外に出ると木々の間から出ている日差しがとても綺麗だった。

「あ～、やっぱりこの山は目覚ましにいいな～」

俺は目が完全に覚めた所で朝食の魚を獲りに近くにある池にいった。
俺はいつもの着物を羽織り、顔を隠して魚を釣りに来ると誰かが立っていた。
俺は敵かと思い警戒して近づいた。

「おい、あんた。」
「ん？お主は？」
「俺はヴェル・ウィンドルと言う者だ」
「ほう、お主があの有名な鍛冶屋ヴェル殿かな？」

フードを被った爺さんは俺に用事がある様だ。
俺は警戒を緩めず話を聞く事にした。

「何者だ・・・・？」
「ん？手紙が来ている筈じゃが？」

「手紙・・・・・・？――――――――――――――あ」

もしかして・・・・・

俺がそう考えていると爺さんがフードを取った。

その人物は・・・・・

「ワシは評議員から来た、オーグと言う者じゃ。よろしく頼む」

「ひょ・・・評議員からの人だとは知らず失礼な事をしました。」

「よいよい、それより話があるんじゃ」

「お聞きしましょう」

俺はオーグさんの話を聞く事にした。

オーグさんの話だと、俺の闇ギルドを潰した噂が広がり評議員は俺の実力を買い依頼しに来たらしい。

「俺に依頼・・・・・？」

「うむ、お主の実力は聞いておる。ぜひ頼みたい」

「依頼の内容次第ですね・・・」

「依頼の内容は簡単じゃ、闇ギルドの殲滅を頼みたい」

「殲滅・・・・・ですか」

「そうじゃ」

お前・・・・闇ギルドに一人でゴー！何て無理に決まってんだろ

そんなの正規ギルドに任せればいいじゃんか。

いやいや、俺死ぬぜ？ナツやエルザとかの戦闘狂と一緒にすんなよ・・・？

「頼む！！報酬はたんまり出す、受けてくれ！！」

「・・・・分かりました。敵ギルドの名前は？」

「うむ、鉄の森（アイゼンヴァルド）と言うギルドじゃ」

「・・・・（よりにもよって・・・・でも、報酬高いんだろうしな～）」
「どうじゃ？」
「分かりました、正式にお受けしましょう」
「そうか！！受けてくれるか！！」
その後、爺さんが帰り次第俺はすぐにエリゴールが現れるクヌギの町に向かった。

「着いたか、予想以上に遅くなっちまったな・・・・」
俺がクヌギの町に着くと駅が風に囲まれていた。
「エリゴールの魔風壁か・・・」
巨大な竜巻が駅を囲っていた、まぁ俺なら解けるけど・・・・
「――――――――――烈風掌」
俺は陣風で空を飛び、魔風壁に近づき掌に風を集中させ竜巻にぶつけた。
竜巻のすべてを破壊するのではなくただ穴を開けた。
すると・・・・
「貴様・・・・何者だ？」
「あ？」
俺が振り向くと巨大な鎌を持った男がいた。

エルザ視点

「片付いたか・・・・」

私は鉄の森の魔道士たちを一掃し、私はすぐにナツをグレイの後を追おうと走った。

しかし、外を見ると巨大な竜巻が駅を囲んでいた。

「な、何だこれは・・・・？」

これでは私達が駅から出られない・・・・・

もしかして、ララバイの放送が目的ではないという事か・・・・？

私がそんな事を考えていると

ドゴォォォォン！！

何やら竜巻の上空ででかい音がした。

「何だというのだ・・・・一体」

私はとりあえず竜巻を解除すべく、ナツたちを探す事にした。

「この・・・・！！」

俺に向かってエリゴールは風の刃を当てようとするが俺は風で空に受け流していた。

「ぜぇぜぇ、貴様何故撃ってこない？」

「決まっている、町が壊れるだろ？」
「ふん！！貴様に闘う気がないのなら俺は先を急ぐだけだ！！」
エリゴールは俺に背を向けクローバーへと向かって飛んでいった。
それを見た俺は・・・・
（・・・・チャ～ンス）
俺は目を輝かせエリゴールに向かって
「翠緑迅（エメラ・バラム）！！」
「なっ！？貴様、卑怯だぞ！！」
「喧嘩に卑怯も糞もあるかボケェ！！」
「グォォォォ！！」
エリゴールは俺の翠緑迅を喰らい吹っ飛んでいった。
かなりのダメージを負ったと見た俺はすぐさま後を追った。

## 鉄の森現る！！（後書き）

主人公の服装を紹介します。

１：着物、武士の格好をラフにした感じだと思ってください。

２：着物、よく職人の人が来ている羽織を着ている。ちなみに寝巻き。

３：ジーパンに革靴、上はパーカーもしくは長袖のシャツに緑のコート

３はフェアリーテイルに戻ったときの服装です。

## 鉄の森現る！！　パート２（前書き）

武士道です。
すいません、ナツとエリゴールの戦闘シーン省きます。
本当にすいません。

## 鉄の森現る！！　パート2

ある線路に一人の男が倒れていた。その男は鎌を背負っている。
鉄の森のエース、エリゴールである。

「ぐ・・・・おのれ～あの男、卑怯な事をしやがって！！」

エリゴールは激昂していたが、エリゴールは自分の目的を思い出し
それ所ではない事を思い出す。

「そうだ、こんな事をしている場合ではない。
一刻も早くこの笛でジジイどもを殺さなければな」

エリゴールはそう呟くと、魔法を使い空を飛んでクローバーの町へ
と急いだ・・・・
しかし、その途中いきなり現れた男に蹴られた。

「き・・・貴様、何故こんな所に・・・」
「お前を倒すためだ！！このそよ風野朗！！」

蹴った男は正規の魔道士ギルド妖精の尻尾（フェアリーテイル）のナツ・ドラゴニルである。
エリゴールとナツは互いににらみ合い、戦闘を開始した。

「お？あれはナツか？大きくなったな～」

俺は上空でエリゴールと対峙しているナツを見て懐かしんでいた。

「まっ、これなら俺の出番は無いだろ。」

俺はそう思いさっさと帰ることにしたが、俺は閃いた。

（待てよ・・・・ここで俺がゼレフの悪魔を倒せば報酬も・・・・）

そう考えた俺はもう少し様子を見る事にした。

ナツ視点

「いたのか！！！？滅竜魔道士（ドラゴンスレイヤー）の使い手が！！！？」

「火竜の・・・剣角！！！！」

ガン！！

という音と共にエリゴールは落ちてきた。

俺はハッピーに向かって叫んだ。

「どうだ！！ハッピー！！！！」

「あい。流石は火竜（サラマンダー）ナツです」

「そーいや、ハッピー俺じゃこいつに勝てねぇからエルザがどうとか言ってただろ！？」

「うわ～猫よりショボイ記憶力・・・」

俺がエリゴールの頭を掴みながらハッピーに問いかけるとハッピーは残念そうな感じで返してきた

俺が顔に付いた血を拭いているとハッピーが話してきた。

「でも、ナツは勝ったよ」
「まあな。しっかし、何で最後の攻撃こいつに当たったんだろ？」
「あい。エリゴールは何処か怪我していたみたいだったよ？」
「怪我？一体誰に？」
「オイラが分かるわけないでしょ」
「う～ん、まっいっか」
俺達はそのままエルザ達が来るのを待った。

エルザ視点

私達が魔道四輪車に乗って来るとナツが既にエリゴールを倒していた。
私はとりあえず魔道四輪車を降りたが魔力を使いすぎたためか体がよろけた。
そこにルーシィが心配する声をかけてくれた。

「エルザ大丈夫？」
「あ・・ああ気にするな」
私はそういってナツたちのほうを見ると二人が口論していた。
私は思わずツムジがいたらもっと楽なのにと思ってしまった。

「いかんな、私はまだあの人の事を頼ってしまうのか」
「エルザ？」
「あぁすまん。ある人の事を思い出していた。」
「ふ～ん」
私はとりあえず二人を止め、今後についての話を始めた。

「ついでだ・・・定例会の会場へ行きマスターの判断を仰ごう」
「クローバーはすぐそこだもんね」

ハッピーがそう返すといきなり魔道四輪車が発進した。

「油断したな妖精共(ハエ)
笛は・・呪歌(ラブバイ)はここだーーーー！！
ざまあみろ！！」

「「「「「なっ！？」」」」」

私達は驚き、私はすぐに追おうとしたが魔力切れで走れなかった。

「エルザ！？大丈夫か？」
「だ、大丈夫だ。お前達は先にいけ」

私は皆を先に行かせ、魔力を回復させることにした。
しかし、その途中意外な人物が降りてきた。

「何やってんだよ・・・・」

俺が思わず口から出た言葉、なぜなら原作ではエルザはあいつらと一緒に走っていくはずだからだ。
エルザはすごく辛そうな顔をしていた。

「・・・・そんな顔をされたら助けないわけにはいかねぇだろ」

俺はエルザの所に飛んでいった。

「お困りかな？妖精女王（ティターニア）？」
「お前は・・・ヴェルか？」
「そうだ。ついでだから運んでいってやろう」
「何を――――――――――――キャ！！」

（・・・・・キャ？）

思わず心の中で思ってしまったが突っ込まないようにした。
俺はエルザを陣風で持ち上げクローバーへ向かう事にした。

## 鉄の森現る！！　パート２（後書き）

次回で鉄の森編終了です。
次はファントムロード編を書く予定です。

## ゼレフ書の悪魔現る！！（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## ゼレフ書の悪魔現る！！

エルザ視点

「お前、魔道士だったのか？」
「まぁ一応な」

私はヴェルが操る風に乗っていた。
それにしても、この風・・・・・あの人に似ている――――――――

『・・・・』
『エルザよぉ。何で泣いてんだよ？」
『ウルサイ・・・私は泣いてなどいない』
『・・・・そうかい。それじゃあ、そら！！』
『キャ！？　な、何をする！！』

私はあの時余り興味のない態度をとってきたツムジにきつく当たってしまった。
しかし、そんな私をツムジは魔法を使って私を飛ばせ慰めてくれた。
私はツムジの風が大好きだった、あの人の風は皆を後押ししてくれる優しい風の様な気がした。
そして・・・・私はあの人のことが――――――――――――

「おい・・・きいてんのか！？エルザ！！」
「！！　あ、ああすまない。少し考え事をしていた」
「まったく・・・ほら、そろそろ着くぞ？」
「あ、ああ分かった。」

ヴェルが指差す方向を見るとクローバーの町が見えてきた。
しかし、そこには巨大な物が立っていた。

「な、何だ？あれは・・・」
「おそらく・・・ゼレフ書の悪魔だろうな」
「ゼレフだと！？いや、それより何でそんな事を知っている？」
「さあな」

ヴェルは私の質問を流すとゼレフ書の悪魔の近くにきた。

「何故ここで止まるんだ？」
「まぁ、あいつが今回のターゲットだからな」
「ターゲットだと・・？」
「まぁ見とけ」
「ま、待て！」

ヴェルは私を上空に停滞させたまま、一人でゼレフの悪魔に突撃した。
私は必死に止めたがヴェルは聞かずに行ってしまった。

グレイ視点

『もう我慢できん・・・・ワシが自ら喰ってやろう」
「あの笛喋ったわよ！？ハッピー」
「あの煙・・・形になってく！！」

ハッピーの言うとおり笛から嫌な色の煙が俺が見ると出ていた。
煙はだんだん巨大な木の化け物に変わった。

『貴様らの魂をな！！！』

その姿を見たルーシィとハッピーはすごく驚愕していた。
化け物は大きく息を吸い込んだ・・・・・何だ？

「いかん！！呪歌（ララバイ）じゃ！！」
「何！？　ちっ！！間に合うか？」

俺はすぐさま魔法で盾を作ろうとした。

「グレイ、盾じゃ無理よ！！」
「うるせぇ！！やってみねぇとわからねぇだろうが！！エルザもいねぇんだ、俺達がやらなきゃだれがやるんだよ」
「魂ってウメェのかな？」
「私が知るわけ無いでしょ！！」
「あい」

俺はふざけているクソ炎を無視して、盾を作った。
すぐに攻撃が来ると思ったが何時までたっても、攻撃は来なかった。

「・・・・あれ？」
『なっ！？貴様何者だ！？』
「通りすがりの鍛冶屋だよ」

俺が化け物を見ると両腕が切断されていた。
そして、その上空にはエルザと顔を布で隠した男がいた。

「さてどうしようか・・・」

俺は風を操りながら、ゼレフの悪魔の攻撃をかわしていた。

『貴様・・・よくもワシの腕を・・・』

「すまないな、隙だらけだったもんで」

『ふざけるな！！』

「うぉっと」

俺は悪魔の口から出る弾を上空へ飛ぶことで避けた。

そして、片手で印を刻んだ。

「暴風波（ストームブリンガー）！！」

『ぐおぉぉあああ！！』

ゼレフの悪魔は頭から俺の風を食らい、チリになってしまった。

そして、ついでに定例会の会場も・・・・

「うわ・・・やりすぎた」

「おい！！やりすぎだ！！」

そういえば、エルザが上空に置いたままだったな・・・・

（！！！しまった。手にしている包帯が取れてしまった。）

俺はすぐに包帯を巻きなおしばれない様にした、エルザは少し見ていたが何とかごまかせたようだ。

俺はエルザをジジイのいる所に置くために降りる事にした。

「お主・・・・やり過ぎじゃぞ？」

「すまない。力加減が難しくてな」

ジジイは俺の姿を見ると何故か嬉しそうにした。
そして、再び話しかけてきた。

「まぁよい、それよりも早く行け」
「何故だ？これをやったのは俺だぞ？」
「こんなことになったのはワシらにも責任がある。それに・・・・・」
「？？？」
「お主はまだ、妖精の尻尾（フェアリーテイル）じゃろ？」
「・・・・・」

俺は無言で再び空を飛び、ジジイに頭を下げて報告に帰った。

「なぁじいさんはあいつと知り合いなのか？」
「なぁに、ただの暴風小僧じゃよ」
「「「「？？？？」」」」
「分からぬままでよい。今はの・・・・」

四人全員が首を傾げている時一人だけ違う人物がいた。
エルザ・スカーレットである。

「・・・・・（あの男の右手の甲にあった、あの海のような青色のペイント・・・・まさか、ツムジ？）」
エルザがヴェルの正体を見破るのはもう少し先の話・・・・・・

## ゼレフ書の悪魔現る！！（後書き）

次回はオリジナル入ります。

ちなみにツムジのギルド内での仲がよかった人物　ベスト5

1　エルザ、ミラジェーン
2　グレイ
3　エルフマン
4　ナツ
5　リーダス

**俺・・・・・捕まりました。（前書き）**

武士道です。
更新頑張ります。

**俺・・・・・捕まりました。**

――――――魔法評議会場ＥＲＡ

「鉄の森（アイゼンヴァルド）が潰れた所で根本的な問題は何も解決しないのだよ」

ここは、魔法評議会場のＥＲＡ。そこでは評議員による会議が開かれていた。

「闇ギルドはまだ星の数ほどある」

「ならば一掃作戦を開始するべきだ」

「しかし、どうやって？」

評議員達が討論をしている中

そこに魔法評議員の一人オーグが言った。

「今回のようにまたゼレフの魔法を持ち出されてはたまらんぞ」

「そもそも何故このような魔法が簡単に持ち出されたのだ？」

「責任問題は管理側まで及びそうじゃな？」

そこに、青い髪と顔に刺青をつけた一人の青年が言った。

「それにしても、あれだけ煙たがってた妖精の尻尾に今回は助けられたようだな？」

「たった四～五人でギルド１つ潰しちゃうんだもん。すごいわね」

この若い二人の評議員の発言に他の評議員は黙ってしまった。

そして、青い髪の青年は続けた。

「認めたくないのも分かるが、これが真実さ・・・・
もし、呪歌でギルドマスター達が殺されていたら事態は最悪だった。
ここにいる俺達の中の何人かは確実に首がとんでいた。」
「馬鹿な！！責任問題をここまで引き上げるつもりか！？」
「話にならん！！奴らの派手な暴れっぷりにはいつも頭を抱えておるんじゃ！！」
反論を述べる評議員のニノ席と三ノ席オーグとミケロに対し青年は言った。
「それにオーグさん、実はこれをやったのはあんたが雇った鍛冶屋だって噂があるじゃないか？」
「ぐっ・・・・そんな訳ないだろう！！わしはそんな奴雇っておらんわ！！」
「それなら、素直に奴らにねぎらいの言葉でもかけてやるんだな」

『『旋風！！サッカーしようぜ！！』』
『ん？あれ・・・？』
俺は今なぜか、俺の親友だった白鷺（しらさぎ）　軌麗（きれい）と霧鮫（きりさめ）　鋼河（こうが）と一緒にいた。
ちなみに鋼河とは昔からの親友で以前金を借りたまま死んでしまったあの人物である。
俺は即座に思った。
（これは夢だな・・・・）

俺がそう思っているといきなり後ろからジジイが現れた。
『どうかな？懐かしいじゃろ？』
『余計なお世話だよ・・・・思い出しちまったじゃねぇか』
『それはすまなかったのぉ。』

ジジイが指を鳴らすと前に見た、あの海辺の景色に変わった。

『それで・・・今回は何のようだ？』
『お主、三つの異常に気付いておるかの？』
『異常？』
『やれやれ、やっぱり気付いておらんかったか』

ジジイはそう話すと俺に説明をし始めた。

『まず、一つ目これはお主の魔力の増加じゃ。』
『それなら、心当たりがある』
『そうか。それじゃあ、二つ目お主のプロテクトを解かせてもらった。』
『プロテクト？』

プロテクト？俺、転生するときそんなもんしてたっけ？
俺がそう悩んでいると

『二つの魔法以外に魔法が使えなくなる事じゃ』
『あぁ、あれか』
『そう。あれを限定つきで解除した』
『限定付き？』
『うむ。魔法は魔方陣などのものなら習得出来るようにしておいた。

まぁ、努力すればの話じゃが・・・
そして、最後の三つ目は換装の魔法を使えるようにしておいた。』
俺はその言葉に耳を疑った。
『換装？』
『うむ。ただし、七つまでしか換装のストックは出来んからな』
『・・・・・分かった。』
『・・・・不満そうじゃの？』
『まぁな、少しチート入ってる気がするんだよな』
『まぁ、ワシからの最後のプレゼントだと思って受け取ってくれ』
『分かったよ』
すると、海が荒れ始めた。
『もしかして・・・またこのパターン？』
『またじゃ』
『少しでもお前をいい奴だと思った俺が馬鹿だったよ！！』
俺はそう言って波に飲み込まれてしまった。
最後にジジイは悲しい顔で言った。
『気をつけろよ？旋風、敵は後すぐにでもやってくるぞ？』
そういってジジイは姿を消した。
「ツムジさ～ん、お客様ですよ～」
「ん・・・・？」

俺が目を覚ますとセシールの声が聞こえてきた。
どうやら、客のようである。俺はすぐに仕事着に着替え、布を巻いて外に出た。

「セシール、どんな人だった？」
「ええ・・・何か評議員の人らしくて」
「評議員？」

俺は少し考えたがとりあえず会う事にした。

「久しぶりじゃの？」
「！！　オーグさん？何でここに？」
「お主、会場を壊しおったな？」
「・・・・はい、跡形も無く」

俺がそういうとオーグさんは言った。

「まぁ、鉄の森は壊滅できた事だしよしとするが・・・・」
オーグさんはそういうと、少し困った顔をしながら言った。
「実はお主に一度捕まってもらわなければいけないんじゃ」
「・・・・・・は？」

俺はいきなり捕まれと言われて驚いてしまった。

「まぁ捕まえると言っても話を聞くだけじゃから」

そういいながらオーグさんは俺の腕に手錠をはめた。

「・・・・すぐに帰れます？俺、今日包丁製作の依頼があるんですけど」
「大丈夫じゃ、すぐ終わる」
「なら、さっさと行きましょう」
俺はセシールに店番を任せ、オーグさんに着いて行った。

「すぐにおわらねぇじゃねぇか・・・・あのジジイ」
俺はすぐに終わると聞かされてきたのだが、着くとすぐに牢屋に入れられた。
「はぁ～マジねぇわ～」
俺がそう愚痴っていると、二人くらいの足音が聞こえてきた。
「・・・・誰だ？」
俺がそう問いかけると帰ってきた言葉はよく聞き慣れた声だった。
「もしかして・・・・ヴェルか？」
「何でお前がいるんだよ・・・・・・エルザ」
そう、そこにいたのは赤い髪の女性エルザ・スカーレットだった。

**俺・・・・・捕まりました。（後書き）**

次回はオリジナル話です。
次回もよろしく。

## エルザとツムジ（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## エルザとツムジ

（成る程な。こいつも会場破壊の容疑で捕まったのか・・・）

俺とエルザは狭い地下牢の中で二人きりだった。

俺が原作を思い出しながら考えていると、

「おい、聞いているのか？」

「え？何もう一回」

俺はあまり聞いていなかったので聞き返した。

「はぁ・・・だから何故お前は捕まっているのだと聞いている」

「あぁ、何か会場破壊の容疑で捕まったらしいぞ？」

「お前もだったのか！？」

「やっぱり・・・お前も？」

俺達はそういって顔を見合わせるとお互いに笑ってしまった。

「くくっ！それにしても、何でここに？実際に会場を壊したのは俺だぞ？」

「あぁそうなのだが、私もお前と一緒に会場を壊したという事になっているらしい」

「へぇ、そうなのか？」

俺がエルザの話を聞いているとエルザが別の話を振ってきた。

「なぁヴェル？」

「何だエルザ？」

「お前はツムジ・ウィンドルと言う人物を知っているか？」
「・・・・・知らないな」
「・・・そうか。それはそうだな」

エルザは悲しい顔をしながら話してきた。
そして、ツムジ・ウィンドルについて話し始めた。

「ツムジは――――――――――――――」

（ゴクン）

俺は唾を飲んでエルザのツムジに対する話を待った。

「とても臆病な人だった」
「・・・・・そうか」

あれ？なんだか泣けてくるぞ？何でかな？
エルザは俺を無視して話を続けた。

「だけど、私はツムジのそんな所が好きだった。」
「・・・・・えっ？」
「臆病なくせに、怖いくせに、敵が来ると膝を震わせながら命を賭けて闘う。私がフェアリーテイルに入れたのもあの人のお陰なんだ」
「・・・・・・・」

俺は無言で話を聞いていた、エルザは話を続ける。

「私の鎧の中に天輪の鎧という奴があるんだが・・・・」
「あぁそれで？」
「実はこの鎧はツムジが作ってくれたんだ」

「へぇ、そりゃすごい」
「あの人が死んだ今は、この鎧が私を守ってくれている気がするんだ」
俺はエルザがこんなに真面目に話している所は見た事がない。
それほど、俺という存在はエルザにとって重要だったのだろうか？
「お前の話を聞いていると、エルザはそのツムジという人物が好きだったのか？」
俺がそう聞くと
「・・・・あぁそうだな。私はあの人のことが大好きだった。」
「！！！！！」
ゴハァ！！と俺は心の中で血を吐いた気分だった。
ちくしょう、エルザめ・・・こんなに真面目に話してきたら破壊力抜群だぞ！？
俺が動揺しているとエルザが話しかけてきた。
「どうかしたのか？」
「い、いや何でもない！！（お前のせいだよ！！）」
「そうか？それでツムジはな？――――――――――――――――」
「・・・・・・疲れた」
あの後ずっと、俺はエルザから自分の事を話された。
俺は、軽く質問を受けて解放された。

「さぁて・・・・帰るか」

俺はあくびをしながらのんびり歩いて帰ることにした。

俺が帰ると少しむくれながらセシールが待っていた。

「あぁ・・・・平和だなぁ」

俺は今茶をすすりながら釣りを楽しんでいた。

今日は久しぶりの休暇である、俺は釣り糸を垂らしながら鼻歌を歌っていた。

「こうゆう生活、昔から夢だったんだよな～」

俺は本当に平和に酔いながら釣りを楽しんでいた。

「おっ！？来たぞ！！」

どうやら、魚がかかったようである。

俺はそれを引っ張り魚と格闘していた。

しかし、そんな時に

「ヴェル！！何処だ！？何処にいる！？」

「・・・・・・」

俺は釣れかけていた竿を驚いて放してしまった。

竿はそのまま池の中へ・・・・・・

俺は無言でただ立っていた。

「ん？いたいた、ヴェル！！鎧の修理を頼みたいのだが・・・・・」

「うあぁぁあぁぁあぁぁあ！！！」

「ど、どうしたのだ！？ヴェル？」

その時の俺は思った・・・・・・

嗚呼、何時になったら俺の平和が来るのだろう・・・・・と

## エルザとツムジ（後書き）

次回はやっとファントムロード編が書けそうです。

## エルザにバレちゃった・・・・・・（悲）（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

**エルザにバレちゃった・・・・・・・（悲）**

「・・・・・・・」
「悪かったって！！いきなり大声出したことは謝るから許してくれ！！な？」

あの後、エルザは何故かいじけてしまった。
今俺はそんなエルザに謝っているところなのである。

「それじゃあ今回の鎧の修理代はいらねぇから！！それでいいだろ？」
「それならいいだろう」
「随分都合のいい耳だこと・・・・・」

俺はエルザの性格の悪さに溜め息をついた。

「それで？どの鎧だ？」
「あぁこれなのだが・・・・・」

とエルザが換装して着たのが俺が作った天輪の鎧だった。

「これは・・・・？」
「あぁツムジが作ってくれた天輪の鎧だ・・・前に話しただろう？」
「あぁそうだが、いいのか？俺が勝手にいじっても」
「お前なら許せる。だから頼む」

まぁぶっちゃけ俺が作ったんですけどね・・・・・この鎧
俺はエルザの頼みを了承して早速修理を始めることにした。
エルザは仕事があるため何処かへ行ってしまった。

エルザ視点

時刻は夕方・・・・
私は今ナツたちと一緒に仕事へ行って帰ろうとしていた所だ。
私はヴェルに任せておいた鎧をとりに行くために皆をついでに連れて行くことにした。

「エルザ何処に行くんだ？」
「私が修理に出していた鎧を取りにいくんだ」

グレイの質問に答えるとすぐにルーシィが聞いてきた。

「そういえば、この前エルザ、ツムジって人の話してたよね？
ツムジって今何処にいるの？」

「「「「！！！！！」」」」

その場にいたルーシィ以外の四人が顔が暗くなった。
ルーシィはその様子を見て動揺していた。

「あ、あれ？私、聞いてはいけない事聞いちゃったかしら？」
「ルーシィって本当に空気が読めないよね～」
「う、うるさい！！」
「いや、いいんだ。もうあの人はこの世にいないからな・・・・」

そんな事を話している間にヴェルの家に着いた。
しかし、呼び鈴を鳴らしてもヴェルは出てこない。
「おかしいな・・・・留守なのか？」
私がそう呟くとグレイが叫んだ。
「おい！！あそこから湯気が出てるぞ！！」
「行ってみよう」
私達は湯気のする場所へ向かった。
エルザ視点終了

「ババンバ、バ、バ、バン～～～～～」
俺はノリノリで温泉のあの歌を歌いながら入っていた。
そして、そろそろ上がろうかなと思いたとうとした瞬間、俺は視線に気付いた。
振り向くとそこには――――――――――――――――
「「「「「「・・・・・・・」」」」」」
四人と一匹の集団に見られていた。
俺は思わず
「ちょ、あんま見るなよ。恥ずかしいだろ？」

空気を壊す発言をかました。しかし、四人は無言で見てくる。
湯気でよく見えなかったがよく見るとそれはエルザたち妖精の尻尾一行だった。

「・・・・・・ツムジか？」
「・・・・・・」

エルザの冷たい問いに俺は無言で反応した。
そんな俺にエルザはさらに冷たい言葉で聞いてきた。

「もう一度言う・・・・・ツムジか？」
「違いますよ～俺は鍛冶屋のヴェル・ウィンドルですって～」

俺は素早く顔に布を巻いた・・・・・
しかし、エルザは無言で俺を見ていた。

「おい！！本当にあのツムジなのか！？」
「生き返ったのか～～！！」
「あい！！」
「この人が・・・ツムジ？」

グレイ達も何かいっているがまず片付けないといけないのはこいつだ・・・・・

「・・・・・・」

無言で俺を見つめてくるエルザ・・・・めちゃ怖い

「さぁ～てと、俺はそろそろ仕事があるんでここで・・・・・」

俺はすぐさま逃げようと走ったが肩を誰かに掴まれた。

俺が誰だ？と振り向くと緋色の髪の女性がそこに立っていた。

「ツムジ――――――――――」

「・・・・・はい」

「これからお前の家で話したい事がある・・・・ゆっくりとな？」

「えっ・・・でも、俺これから仕事が――――――――」

「何か言ったか・・・・・？」

「・・・何でもありません」

俺はそのまま腰にタオルを巻く事も許されず全裸でエルザにマイホームへ連行された。

「許してください・・・・・」

「・・・・・」

俺は今我が家でエルザから説教？を受けていた。

しかし、俺の今の格好は酷いと思う。何故って？

それは・・・・・

「服くらい着させてくれ・・・・・・」

「・・・・・」

「無視かよぉ・・・・・」

全裸のまま進展していない。これでは説教というより、見せしめに近い。
そこに、救いの女神ルーシィちゃんが来た。
「エルザ、そこらへんにしてあげようよ。ツムジさんも何か訳があったにちがいないよ」
「・・・・・そうだな。服を着ていいぞ」
「ありがとう！！」
俺はすぐさま服を着た。
まったく、湯冷めしちまったじゃねぇかよ・・・・エルザめ、覚えてろよ？

「さて、服を着たことだし本題に入ってもらおう」
「本題って・・・・？」
「何故生きていた事を隠していた？」
言えない・・・・・エルザには口が裂けても今は言えない。
「悪いな、今は言えない」
「・・・・・そうか」
エルザはそういうと立ち上がった。
もしかして、パンチ来るか？と思った俺は防御体制をとったがパンチは来なかった
あれ？と思いエルザを見るとエルザは片方の目から涙を流していた。
「エルザ・・・・・お前」
「・・・・寂しかったんだぞ？あの日にお前がいなくなった時私が

どの位泣いたか分かるのか？
だけど・・・・・」

「？？？」
「生きててよかった・・・・・・・」

エルザがそういうと俺に抱きついてきた。
俺は仕方ないなという感じで抱き返した。
そんな所をみたルーシィとハッピーは

「でぇきてぇる」
「巻き舌風に言わないの」

ボケと突っ込みをしていた。

その日はエルザ達が泊まる事になった。

## エルザにバレちゃった・・・・・・（悲）（後書き）

武士道です。
次回はオリジナルです。よろしくお願いします。

## 幽鬼の支配者の切り裂き魔　前編（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 幽鬼の支配者の切り裂き魔　前編

チュン、チュン、チュン――――――――――――

「・・・・・・」

鳥の鳴き声で無言で起きた俺は、眠気覚ましのため外に出た。

スゥ～ハァ～

俺はいつもはあまりしないが、上半身を脱いで武術の稽古を始めた。初めは正拳突きをしていたが、飽きてきたので足技の練習をしていた。

「ふん！！はぁ！！」

俺は上段に回し蹴りをして、汗を拭きながら玄関を見るとエルザがじっと見ていた。

俺はエルザに話しかける事にした。

「おい、エルザ何か用か？」

「えっ？　あ、いや別に用というワケでもないのだが・・・・・」

「？？？」

エルザの様子がおかしい、何かあったのだろうか？

「どうした？何かあったのか？」

「いや、ツムジの特訓をしている所久しぶりに見たなぁと思って・・・」

「何だそんな事か・・・・」
俺は鼻で笑ってエルザに話しかけた
「そろそろあいつらも起きるだろ。朝飯を獲りに行って来る」
「私も行くぞ」
「あぁ好きにしろ」
そうして、俺はエルザと一緒に池に釣りに行った。

「「・・・・・・」」
俺らは今黙って池に糸を垂らしている所だ。
俺がじっと待っているとエルザが何かそわそわしていた。
「どうした？トイレか？」
「・・・・・・」
「痛い！！！」
俺がそう聞くとエルザに思いっきり腹を殴られた。
俺は腹を押さえながら待っていると竿が動いたので竿を引っ張った。
「フィィィィィシュ！！」
「おおっ！！」
俺が軽快に魚を釣るとエルザも羨ましそうに見ていた。
それから三十分・・・・・

「・・・・・・」
「おっ？引っ張ってんぞ？」
「本当だ！！」

やっとエルザの竿に魚が掛かりエルザが引っ張る・・・・
しかし、中々出てこない。俺がはてと思っていると水中から何かが出てきた。

「何だ？？魚・・・・じゃないよな？」
「あぁそうだな」

出てきたのは、魚ではなく黒いマントを羽織った一人の男・・・何だこいつ？

「とりあえず、運ぶか？」
「そうしよう」

俺は男を担ぎ、エルザは獲れた魚を持って家に帰った。

「よし、食っていいぞ～」
「「「「おおっ！！」」」」

俺が作った料理にナツたちががっつく・・・・・
俺はその様子を見ながら、自分の分の焼き魚を食う事にした。

「うめぇ～～！！」
「本当に美味いな・・・・ツムジってこんなに料理上手かったか？」
「へぇ～ツムジさんって料理も得意なんだ～」
「魚だぁ～～！！ウパァ～～～～」

作った料理はただの焼き魚なのだが・・・・・・・
セシールから貰った、あの塩が良かったのかな？と俺が考えている
とエルザが聞いてきた。

「ツムジ・・・・フェアリーテイルには戻るのだろう？」
「・・・・・・」

俺は無言で飯を食い終わり、箸を置いた。

「残念だが、俺は戻らない」
「！！！　どうしてだ？皆もあったら喜ぶに決まっている」
「すまないな、無理なものは無理なんだ。そのかわり、何時でも遊
びに来い」
「・・・・・」

どうやら、エルザは納得していない様子だ。
すると、ナツがいきなり言ってきた。

「ツムジ！！俺と勝負しろ！！」
「おい！！　ナツやめとけ！！」

グレイが止めるがナツは聞かなかった。
俺は仕方なく了承する事にした。

「いいぜ、掛かって来い」
「おう！！」
俺らは外に出て勝負を開始する事にした。

ルーシィ視点

「ねぇグレイ、ツムジって強いの？」
「わからねぇ、でもあいつは六年前に竜狩りをしたっていう噂があった。」
「竜狩り！？」
「あい！！　竜を殺した所をエルザやミラが見てたって話だよ？」
「ミラさんも！？」
私が驚いていると既に戦闘が始まっていた。
「おらぁ！！」
「よっと・・・・」
ツムジさんはナツの攻撃を容易くかわしていた。
ナツは攻撃は当たらないと判断したのか大きく息を吸い込んだ。
「火竜の――――――――――――――――咆哮！！」
ナツの口から巨大な炎が出て、ツムジさんに向かって飛び直撃した。
私は驚いて叫んだ
「ちょっと！！大丈夫なの！？」

「大丈夫だ」
「だって、エルザ。あれを見たら・・・・」
私が土煙のほうを見ると人影があった。
ナツはそれを見て何か呟いている。
その瞬間、ツムジさんが手をかざすと何か力の塊が土煙を消し飛ばしてナツに直撃した。
「・・・・すごい。」
これが、エルザが話していた人の力・・・・・・・
「ふぅ、終わりだな？ナツ？」
「くっそ～！！次はぜってぇ負けねぇぞ」
「楽しみにしてるよ」
俺はナツに笑いながら語りかけ、手で着物をはらいた。
すると、黒い何かが飛んできた。
俺はとっさに体を捻ってそれをかわした。
俺はすぐに飛んできた方向を見ると、さっき釣ったあの男が立っていた。
「ちっ！！まさか、生きているとなぁ。ツムジ」
「誰だ？おめぇ」
「お前を六年前に刺したあいつの依頼人ってとこだ」
「ほう・・・・お前があいつを依頼したと」
「そうだ」

こいつ、少し出来るな・・・・
俺はそう思いつつ、これはチャンスかもしれないと思った。
なぜなら、新しい換装の魔法を試すときだからだ。
俺は屈伸をして、あいつに向かって指を曲げて言った。

「いいぜ、掛かって来いよ？」
「てめぇ・・・・・後悔するなよ！！」

## 幽鬼の支配者の切り裂き魔　後編（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 幽鬼の支配者の切り裂き魔　後編

「おらぁ！！！」

黒いマントを羽織った男は俺に向かって黒い短剣を投げてきた。
俺はそれを避ける瞬間に英雄を使ってかわしていた。

「くそっ！！てめぇいつまで逃げてんだ！！いい加減攻撃してきやがれ！！」

男は反撃しない俺に向かって怒声を浴びせた。
俺はそれを無視して男の攻撃を待った。
男は痺れを切らしたのかいきなり吼えた。

「この野郎！！これでもくらいやがれぇ！！」
「・・・・何だ??」

俺が男の手に黒い塊が出来ていた。
あれは・・・・・・

「奉天牙戟：黒天！！」

男がそう叫ぶと男の手に集まっていた黒い塊が三国志に出てくる奉天牙戟になった。

（・・・・こいつ、何の魔法だ??）

「死ねぇ！！」

男は俺に向かって黒い奉天牙戟を投げてきた。
俺はすぐに風の壁を作ってそれを受け止めた。
しかし、黒い槍は俺の風の壁を貫いてきた。

「なっ！？俺の風を貫いただと！？」
「ぎゃはははは！！死ねぇ！！」
「くっ・・・・！！」

俺はすぐに英雄を使いそれを受け止めた。

（ぐぅ・・・・何だ、この力は並みの魔道士じゃ勝てねぇぞ！？）

「くっそ、おらぁ！！」

俺はそういいながら奉天牙戟をあいつに投げ返した。

「なっ！？ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

返されるのは予想外だったのか男は奉天牙戟を腹に食らって空に飛んでいった。
途中、あいつの腕に幽鬼の支配者のマークが見えたが俺は放っておく事にした。

「――――――――――ぐっ！？」

俺が手に激痛を感じ手を見ると手が少し黒く変色していた。

「・・・・何だ？これは・・・・・・」
「ツムジ！！大丈夫か！？」
「あ、あぁエルザ大丈夫だ」

俺はエルザに見られないよう手を隠して答えた。

「ツムジさんって凄いんですね！！私、魔法を素手で返す人初めてみました！！」

「ん？君は・・・・・？？（ルーシィだろ？知ってるぞ）」

「あ、私ルーシィっていいます。最近、フェアリーテイルに入りました。よろしくお願いします」

「あ～、そんなにかしこまんなくてもいいぞ」

「えっ・・・でも」

「いいから、いいから」

エルザ達も周りでうんうんと頷いていた。

「さて、そろそろ帰れ。爺さん達が心配するぞ？」

「む・・・そうだな。今日はこれで帰らせてもらおう、だがまた来るぞ」

「じゃあな～ツムジ！！」

「あい！！」

「ツムジぃ！！早く帰って来いよ」

「それじゃあ、ツムジさん私達はこれで」

「おう。いつでも来い」

エルザたちはそういってギルドへ帰っていった。

俺は痛む手の平を我慢しながら家の中に入った。

「くそっ・・・何だこれは？」

俺の手は黒く変色していたが、俺の英雄の自己治癒能力強化によって治り始めていた。

俺は手に包帯を巻いて自然に治るのを待つ事にした。
途中、俺は工房を見るとエルザの天輪の鎧が置かれていた。
「・・・・あいつ、忘れていったな」

謎の男視点

ザバァ！！

俺が気付いたのは水の中だった。
俺は慌てて水上へ出た。
「ぶはぁ！！・・・・くっそあの野郎！！」
俺は自分の腹を見ると黒く変色していた。
「ちっ、まさか俺のあの技を跳ね返すとはな。あいつ、もしかして・・・・・」
俺は少しためて言った。
「俺と同じ転生者か・・・・・？」
すると、俺の落ちた音が聞こえてきたのか近隣の人たちが集まってきた。
どうやら、俺が落ちたのは町を流れている川のようだ。
「邪魔くせぇなぁ・・・・」

俺は溜め息をして思い切りジャンプした。
俺は空中で黒い鎖鎌を出して、近くの一番高い塔に登った。
そして、俺は・・・・

「黒魅月(くろみげつ)！！」

俺がそういうとバランスボール位の月の形の黒い塊が出来た、俺はそれを町の中央と思われる所にそれを撃った。
すると・・・・

ドゴォォォォォォォォォォン！！！

町の中央に巨大なクレーターが出来た。
そして、町の中央には黒い染みのようなものが出来ていた。
人々がそれに触れるとたちまち体中が黒く染まった。

「くくく、この力で次こそ殺してやるぞ――――――――――――――――――――――」

俺がそういうととても古い新聞が俺の顔に当たった。
俺がそれを見るとニヤァと笑った。

「――――――――――――――――――妖精の風(フェアリーウィンド)のツムジ」

そういって男は不適に笑いつづけた。

## 幽鬼の支配者の切り裂き魔　後編（後書き）

次回幽鬼の支配者はいります、
オリジナル展開ありです。

## 幽鬼の支配者襲来！！（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 幽鬼の支配者襲来！！

「はぁ～」

俺は溜め息をつきながら、金槌を振るっていた。
すると、セシールが話しかけてきた。

「どうしたの？ツムジ」
「あ？実はばれちゃったんだよ・・・・」
「何、素顔の事？それとも、フェアリーテイルの魔道士だったってこと？」
「どっちもだよ・・・・・」

俺が少し残念そうな顔をして話すと、セシールが大げさに言ってきた。

「ええっ！？ちょ、それ大丈夫なの！？」
「正直マズイ、しかも一番知られたくない奴に知られた・・・」
「もしかして、この前の緋色の髪の女の子？」
「・・・・・そうだよ」

俺が悔しそうに呟くとセシールが大笑いした。
・・・・何故だ？

「あっはっはっはっ！！やっぱりね！！」
「やっぱり？」
「あの娘の帰るときの顔、来た時よりも生き生きしてたもの」
「お前、そういうとこよく気付くよな・・・」
「むしろ、あなたが鈍感なんじゃない？それより、これ見て」

「ん？」

セシールが渡してきた新聞紙を見るとそこにはエルザ達が乗っていた。

どうやら、ガルナ島の問題を解決してきたようだな・・・・

「ふふふ・・・・」

「・・・何だよ？」

俺が新聞を見ているとセシールが笑ってきた。

俺は金槌を片付けてエルザの天輪の鎧を返しに行く事にした。

「やっぱりツムジ、あの娘の事が好きなんでしょ？」

「は・・・・？」

そんな筈は無い。だって所詮漫画の世界の人物、そんな存在に恋なんてするわけが・・・・

俺が頭を抱えて悩んでいるとセシールがにやにやしていった。

「やっぱりそうなの？」

「ん、んなわけねぇだろ！！」

俺は天輪の鎧を抱えてマグノリアへと向かった。

「もう、素直じゃないわねぇ。まぁそこが可愛いんだけど・・・・」

私はそういいながらツムジの背を見ていた。

「あ、そうか・・・・・・もう、隠す必要はなくなったのね。ツムジ」

私は消えていくツムジの背中を眺めていた。
心の中で応援しながら・・・・

「何だ・・・・・？」

俺がマグノリアへ着くとギルドの様子がおかしかった。
俺はすぐにギルドへと急いだ。

「何だよ・・・・これは？」

俺が見たのはガジルの鉄が刺さっただけではなく、黒い染みの様な物がついているギルドだった。
俺はすぐにギルド内へと向かった。

「おい！！爺さん、これはどういうことだ！？」
「つ、ツムジ！？お主、顔の布はどうした？」
「もうばれたからいらねぇんだよ。それより、どういうことだ？この状況は？」

俺が質問するとエルザ達がやってきた。

「マスター！！何なのです、あれは！！」

「じっちゃん！！」
「じいさん！！」
「わかった、わかった説明するから落ち着け」
俺らは爺さんの話を聞くことにした。
爺さんの話だとこれをやった犯人は原作通りの鉄のガジルともう一人、黒呪のキレイだと言う事だ。
「黒呪のキレイだと・・・・？」
俺は予想外の展開に驚いて思わず声を出してしまった。
俺は居るはずもない男の事を思い出した。
まさか、白鷲　軌麗じゃないよな・・・・・
俺が考えているとエルザ達が話しかけてきた。
「もしかして、この前ツムジと戦ったあの男ではないのか？」
「分からん・・・それより、どうするんだ？爺さん？」
「放っておけい。」
「でも、じっちゃん！！」
「ナァツゥ！！いい加減にせんかぁ！！」
爺さんはそういうと、何故かルーシィの尻をたたいた。
「何で私のお尻・・・・？」
「マスター怒りますよ？」
「それよりもエルザ、ほら」
「ん？何だ？ツムジ」
「ちょ、無視ですか！？ツムジさん？エルザも！？」
「ぷっ！！」
「笑うな！！」

エルザに鎧を渡すと、俺はすぐに帰る準備をした。

「ツムジ、行ってしまうのか？」

「あぁ」

「もう一度ここで暮らさないのか？」

「暮らさない」

「・・・・・」

「エルザ・・・・・」

「・・・グスッ、何だ――――――――――あっ」

俺は無言でエルザの手を握った。

エルザの手に鉱石を渡しながら話した。

「危険だと思ったらこれに強く念じろ、想いが強ければ強いほどこの鉱石は効果を発揮する。」

俺はそのまま、魔法を使って飛んだ。

エルザが俺に叫んだ。

「ちょっと待て！！これは何の効果があるんだ！？」

「使えば分かるさ」

「ツムジ！！」

エルザ視点

「まったく、あいつという奴は・・・・」

私は遠くに見えるツムジを見ながら言った。

「それにしても・・・・」

私は渡された鉱石を見た。とても綺麗な深い緑色の鉱石で魔力が宿っていた。

「エルザ～！！あれ？何、その石？」

「ん？これか？さっき、ツムジが私にくれた物だ」

「～～～～～」

ルーシィは鉱石を見ながら難しい顔をしていた。

「どうした？」

「ん～～～、その石何処かで見た事あるのよねぇ」

「そうなのか？」

私達は互いに渡された緑色の石を見ていた。

「ま、まぁとりあえずギルドの中へ戻ろう。今後の事を話し合わなければな」

「そ、そうね。行きましょ」

私達はその石の事は後で考える事にして、ギルドへ戻った。

## 幽鬼の支配者襲来！！（後書き）

次回は転生者同士の戦闘を書きたいと思っています

## 幽鬼の支配者襲来！！　その二（前書き）

武士道です。
幽鬼の支配者編は三話くらい続くと思います

## 幽鬼の支配者襲来！！　その二

「・・・・・・」
「ツムジ？どうかしたの？」

俺は家に帰ってからずっとあの男の事を考えていた。
あの男の魔法は得体の知れない魔法だ。
あの黒い塊といいあいつ、何者だ？

「・・・・・・・」

俺は今朝の新聞を見ると『ボーディス壊滅！？』という記事が書かれていた。
そう、昔エルザとマグノリアに行く途中にあったあの街だ。
俺が気になるのは新聞に書かれている町の現状だ。
写真を見ると所々に黒い染みのようなものがあった。

「・・・・俺の手の時と一緒だ」
「え？何か言った？ツムジ」
「いや、何でもない」

俺はどうしても気になったので新聞を置いてコートを羽織って出かける準備をした。

「ツムジ？何処か出かけるの？」
「あぁ、少しボーディスへ行って来る」
「あの壊滅した場所へ？危険じゃない？」
「大丈夫さ」
「そう・・・・じゃあ行ってらっしゃい」

「あぁ、行ってくる」
俺はセシールにそう返して陣風を使ってボーディスへと向かった。

「これは・・・・予想以上に酷いな・・・・」
俺がボーディスに着くとそこは黒色に染まった街があった。
俺はゆっくりと地面に降りた。

「・・・・何だこれは？」
俺が降りて周りを見渡すと人間らしき形をした黒い塊があった。
俺はそこらへんに落ちてた棒で突くと灰のように崩れてしまった。

「大方、あの男の仕業だろうな。それにしても・・・・・・」
周りをよく見るとさっきの物と同じような形の物がたくさんあった。
おそらく、あの男に殺された人間なのだろう。

「・・・・惨いな。まさか、こんな時に転生者とは」
俺は周りの人間？のような物を陣風ですべて塵にして帰ることにした。
そういえばあいつ、幽鬼の支配者のマークがあったな・・・
ちっ！！幽鬼の支配者と組まれたら厄介だな。
帰る途中、俺は歯を食い縛りながら言った。

「黒呪のキレイだったか・・・・？
――――――――――――――ふざけやがって・・・・」

エルザ視点

「レヴィ！！ジェット！！ドロイ！！」
「レヴィちゃん・・・・！！」
「くっ！！」

私達が町の人の話を聞いて来て見ると木に張り付けにされているレヴィ達がいた。
私達が歯噛みしているとマスターがやってきた。

「ボロ酒場までなら我慢できたんじゃがな・・・・」
「マスター・・・・」

マスターは一度レヴィ達を見ると顔を背いて震えた。
そして・・・・

「ガキの血を見て黙っている親はいねぇんだよ――――――――――――」

バキィ！！

マスターは自分の持っている杖を握りつぶしていった。

「――――――――――――――戦争じゃ！！」

私達はレヴィ達の敵を討つためにフィオーレ王国で北東に位置するオーグの町へと向かった。

「これでよしと・・・・」
「あれ？ツムジ？どうしたの？」
「あぁ――――――――――――」

俺は自分の換装で使う武器をすべて確認して七つの武器をすべてしまった。

「――――――――俺専用の武器さ」
「？？？」

俺はそうして幽鬼の支配者のいるオーグの街へと向かった。
ぶっちゃけ、偵察のためだが・・・・・

「・・・・どうやら、もう始まっているようだな」

俺が幽鬼の支配者のギルドへ着くと既に妖精の尻尾が乗り込んでいる様だった。
そんな事はさて置き俺の目的の、黒呪のキレイと探しに行った。

マカロフ視点

「ジョゼぇ・・・・あれは何の真似じゃ・・お？」
「これはこれは・・・お久しぶりです。マカロフさん」
ワシが見ると椅子に腰をかけ、帽子を被った男がそこにいた。
帽子を被った男はそのまま話を続けた。
「六年前の定例会以来ですかねぇ。いやぁ、あの時は参りましたねぇ
ちょっと、お酒が入っていたもので――――――――――――」
ドゴォォォォォォン！！
ワシは男の話を聞かず魔法で大きくした拳で殴った。
「世間話をしにきたわけじゃねえんだよ。ジョゼ」
「ほほほ・・それはそれは」
思念体じゃと！？こやつ、もうギルドへはいないのか？
「聖十大魔道同士の戦いは天変地異を起こす。お分かりですよね？
マカロフさん？」
「どこにおる！！正々堂々こんかい！！」
すると、奴の足元にルーシィが現れた。
そして、ジョゼは手元のナイフで・・・・・
「よせぇっ！！」
すると、後ろから巨体の男が現れた。

（しまった！！こやつ、気配がない！！）

ワシがやられたと思ったその時、巨体の男がいきなり吹っ飛んだ
ワシが何事かと思ったその時、空から一人の男が降りてきた。

「大丈夫か？じいさん？」
「ツムジか・・・・助かったぞ」
「それより、あんたはガキ共連れてギルドへ逃げろ」
「何故じゃ？」
「それは・・・あいつがいるからだよ！！」

ワシが話している途中にいきなり黒い塊が飛んできて、ツムジが風を使ってそれを防いだ。
あれは・・・・

「さぁ、早く逃げろ！！」
「う、うむ分かった。気をつけるんじゃぞ！！」
「あぁ・・・・・」

ワシはツムジにあやつを任せて、下へと降りた。

## 幽鬼の支配者襲来！！　その三（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 幽鬼の支配者襲来！！　その三

「――――――――――――――――さてと」

俺は爺さんたちをこれから壊れる予定の建物から逃がすように言って改めて男のほうをみた。

男は暑苦しい黒いコートを着たまま準備体操を始めていた。

「どうやら別れの挨拶は終わったようだな？」

「別れ？何言ってんだお前？やられんのはお前一人だろ？」

「・・・・てめぇ、この前といい本当にむかつく野郎だぜ」

男は手から黒い霧状のオーラを出していた。

あぁ・・・今ほどあのクソ神様を殴りたいと思った事は無いね

まぁとりあえず一体どんな能力かはまだ分からないが、分からない以上先手必勝が有効だろうな。

スピードも俺の方が格段に上のようだし一気に陣風（トレアー）の風で決める！！

俺は英雄（ヒーロー）で強化した体に風を纏わせて一気に奴との距離をつめた。

「！！　はやっ！！？」

「一気に決める！！」

俺は左腕の肘を手始めに奴の腹に入れた。

「ぐっ！？　この野郎！！」

男は黒いオーラを俺に当てようとするが、英雄（ヒーロー）状態の俺には当たらない。

俺は男の頭上にジャンプして跳んで、両手のひらを合わせて魔力を

込めた。

「風刃――――――――――――――――風車ぁ！！」

俺が両手を振りかぶると巨大な風の円形の鋸が男に向かっていった。
男はすぐさま黒いオーラで迎撃しようとするがオーラと俺の風が当たる瞬間

「かかったな！？　散！！」
「何だと！？」

俺がそう叫ぶと巨大な風の円形の鋸は分裂し、おそらく数百はくだらない数の手裏剣の形になり男を襲った。

ズドドドドドド！！

何とか勝てたか・・・・・？
俺はボロボロになっている男が立っていた地面を見る、男は土煙のせいでよく見えないがおそらく死にはしなくとも重傷を負っている筈だ。
俺はそう確信して、その場を後にしようとして気付いた。

「ちょっと待て・・・・・アリアは何処に行った？」

そう、エレメント４の一角を担うアリアがさっきまでそこで倒れていた筈なのにいないのだ。
一体何処に行った？
俺は辺りを見回したが見えなかったのでその場を後にしようとした。

スウウウウウ――――――――――――

「！！　しまった！？」

「か・・・か・・・悲しい！！」

「ぐぅ・・・がぁぁぁぁぁぁ！！」

油断した・・・・こいつの魔法を忘れていた、確かこいつ気配を消せるんだった。

俺はそのまま下へと急降下して落ちていった。

エルザ視点

「ガキ共ぉ！！一時撤退じゃあ！！」

マスターが急に帰ってきたと思ったら、いきなり撤退を命令した。

何かお考えがあると言うのだろうか？

「何でだよじっちゃん！！」

「そうだ！！俺たちはまだ闘えるぞ！！」

「「「そうだ、そうだ！！」」」

ナツやグレイ、他のメンバー達がマスターへ反発するがマスターは意見を変える事はなかった。

「よせ！！マスターにも考えがあっての事だ、ここは言う事を聞くべきだろう」

「「でもよぉエルザ――――――」」

「何か言ったか？」

「「「「皆ぁ！！急いで帰るぞぉ！！」」」」

マスターの言われたとおりに私とナツ、マスター以外のメンバーは撤退を始めた。
私とマスターとナツは追っ手を食い止める係をやる事にした。

ズドォォォォン！！

私達が戦闘を開始しようとした瞬間、上から何かが落ちてきた。
私がそれを確認すると、それは私がよく知っている男、ツムジだった。
しかし、ツムジにしては魔力が感じられない。

「ツムジ！？大丈夫か！？」
「・・・・・・」

私がツムジに話しかけてもツムジは反応しなかった。
そこにマスターとナツが寄ってきた。

「ツムジ！？くそ、誰にやられたんだ！？」
「まさかツムジがやられるとはのう・・・・エルザ、一時撤退するぞ」
「分かりましたマスター」

私はツムジをおんぶして運んでいると、途中でナツが消えたが心配する必要はないと判断してそのまま妖精の尻尾（フェアリーテイル）へと帰った。

東の森――――――ポーリュシカの家にて

「どうじゃ？何とかならんか？」
「どうなんですか？ポーリュシカさん」
エルザとマカロフがベッドで眠っているツムジを心配そうに見ながらポーリュシカに尋ねる。
ポーリュシカは不機嫌そうに答えた。
「これは風の系譜の魔法だね。〝枯渇（ドレイン）〟・・・対象者の魔力を流出させてしまう恐ろしい魔法だ。
流出した魔力は空中を漂いやがて消える」
「「・・・・・・」」
「漂っているこの子の魔力を集められたら回復も早いんだけどね・・・もう遅いね、こいつは長引くよ」
そう言ったポーリュシカは無言でツムジを見て呟いた。
「まったく・・・ギルドをあんな芝居で逃げて平穏に暮らしていると思ったらまた戻ってきちまったのかい？そして、この様とは・・・馬鹿な子だね」
その発言に激怒したのはエルザである。
「ポーリュシカさん！！そんな言い方はないでしょう！！」
「これ、よさんかエルザ」
激怒したエルザをマカロフが抑える、そしてマカロフが言った。
「ツムジを頼むぞ」

「・・・うるさいね。さっさと行きな！！人間は嫌いだよ！！」

マカロフはエルザを連れてギルドへと帰っていった。

マカロフたちが言った後、ポーリュシカはツムジの顔を見ていった。

「ギルドから逃げ出す程の臆病者のあんたが何で今戻って来たんだい？

こうなる事は分かっていただろうに・・・・・馬鹿な子だね、本当に」

## 幽鬼の支配者襲来！！　その三（後書き）

あと二話で幽鬼の支配者編は終了予定です。

## 幽鬼の支配者襲来！！　その四（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 幽鬼の支配者襲来！！　その四

エルザ視点

まさかツムジがやられるとは・・・・・一体誰が？
私はそう考えながらシャワーを浴びていた。

ツムジがそう簡単にやられるわけが無い。おそらく、不意打ちでも喰らったのだろう。

「・・・・・くっ！！」

私は壁を軽く殴りつけて歯をかみ締めた。
ツムジがあんなになるまで頑張っていたのに私は何をしていたんだ・・・
私は自分の無力さに嘆いていた。

しかし今は目の前の敵を排除する事を優先しなければ・・・・・
ミストガンやラクサスは不在、マスターが戦える状態なのはありがたい事だが歳だ。
それに持病の発作もマスターにはある、無理はさせられない。

他のメンバーも大小なり怪我をしている。
そうなると、S級の実力に近い実力を持つ者は限られている。
しかし、その実力を持つ者は現在療養中・・・ツムジが健在だったら楽なのだったのだが。

賭けるとしたらナツの可能性か・・・・・
私はそう考えながらタオルで体を拭いていた。

「しかし・・・何故ツムジがあの現場にいたのだ？」
そう、少なくともツムジはあの時ギルドに戻る気は無いように見えた。
それに、臆病なツムジがあんな戦場真っ只中にくるようには思えない。
そうなると、ツムジが戦場に来るに負えない理由があったのだろうか？

「・・・・・」

私はタオルを体に巻きつけながら考えていると、隕石でも落ちたかのような音が聞こえた。
私は何事かと思いながら、タオルを巻いたままの状態で外に出た。

「予想外だ・・・まさか、こんな形で攻めてくるとは」

私が外に出てみたのは、巨大なギルドが足を動かしながらこちらに向かってくる光景だった。
私が唖然としているとマスターが出てきた。

「ファントムか・・・・・」
「マスターどうしますか？」
「お主はナツ達を連れてファントムへ乗り込め、ワシはここで相手の攻撃に備える事にする。」
「分かりました。」

私が換装していつもの鎧に着替えて、ナツ達を呼びに行くとマスターが咳き込み始めた。

「マスター！？大丈夫ですか！？」
「ごほっ！ごほっ！」
「これでは・・・・ミラ！！早く来てくれ！！」
「どうしたのエルザ！？　マスター！？大変・・・いつもの薬を飲ませなきゃ」

私はミラにマスターを任せると、巨大なギルドから砲台が出てきた。
砲台から巨大な弾が発射されたのを見て、私は換装して自分が持っている最高の防御力を持つ鎧
金剛の鎧に換装して敵の砲撃を受け止めた。

「うぅ・・・・うぁぁあぁぁあ！！」

しかし、砲撃を止められたが私は吹き飛ばされた。

キレイ視点

「流石はエルザ・スカーレットと言った所か・・・」

俺は魔道収束砲ジュピターを止めたエルザを見ながら言った。
すると、ウチのマスターのジョゼが話しかけてきた。

「おや～珍しいですねぇ？・・・貴方がそんな大怪我をしている所始めて見ましたよ」
「うるせぇ・・・・」

俺はあの野郎から受けた傷を抑えながら言った。

あいつの風の魔法で俺の右腕がボロボロだ・・・
闇魔の野郎からはそんなに強い能力は持ってないと聞いていたのだが騙されたな。
あいつ、自分の能力をフルで使ってきやがる。
俺の能力は1つだけ・・・・この呪いの力だけだ。
俺は左手から黒いオーラを出した。

「キレイさん？その能力はここでは使ってはいけませんよ？」
「・・・・分かってるよ」
「それと・・・次は勝ってくださいね？」
「分かってるって言ってんだろ！！」
「おぉ怖い怖い・・・・」
「ちっ！！」

俺は舌打ちをしながら部屋を出ようとするとガジルが出てきた。

「よう、随分お疲れじゃないか？」
「うるせぇよ・・・・」
「お前が気になっていた奴、どうやら療養中らしいぜ？」
「・・・・何だと？」

俺はガジルの話を聞く事にした。
どうやら、俺との戦闘の後にアリアが不意打ちでドレインを当てたらしい。

「どうやら・・・期待はずれみたいだったようだな？ギヒッ！！」

俺はガジルの腕を強く掴みながら言った。

「うるせぇよ・・・アリアも余計な事をしやがって」
「ふん、負けた奴が何を言っているのやら・・・」
「んだと・・・？」
俺が左手から呪いのオーラを出しながら話すと、ジョゼが割り込んできた。
「お二人とも・・・ここでは戦闘は禁止ですよ？」
「「ちっ！！」」
俺は左手に纏っていたオーラを解いて、部屋を後にした。

「マスターあの野郎はどうもいけすかねぇ」
「まぁまぁガジルさんほっといてあげなさい・・・」
ジョゼは苦笑しながら話を続けた。
「所詮あいつは捨て駒・・・・私が出向けばあんな小僧は一捻りですよ」
「ギヒッ！！それじゃあ、俺も仕事へ行こうとするかねぇ」
「一体何処へ・・・・？」
「何処でもいいだろ・・・・」
ガジルはそういうと、部屋から出て行ってしまった。
ジョゼはジュピターを見て怯えている妖精の尻尾を見ながら言った。
「マカロフ・・・貴様に絶望をあたえてやる」

「くそっ！！」

キレイは憤慨していた・・・・・

「たかが、ガジル如きになめられるとはな・・・・あいつ、殺すか？」

キレイは黒いオーラを出しながら呟いた。

「まぁいい、あの男は療養中なら好都合だ。手始めに妖精を喰らってやる」

キレイは不適に笑いながらフェアリーテイルのギルドを見つめていた・・・

## 幽鬼の支配者襲来！！　その五（前書き）

武士道です。
あと二話位で幽鬼の支配者編を完結できたらいいなと思っています。

## 幽鬼の支配者襲来！！　その五

「うぅ・・・・・」

俺が目を覚ますと懐かしい天井が見えた。
おそらく、ポーリュシカさんの家であろう。

「目が覚めたのかい？　どうだい気分は？」

俺が体を動かそうとすると妙な気だるさが残っていた、それに頭もグラグラする。
正直、そうとうキツイが外から聞こえる音を聞くと居ても立ってもいられなかった。

「あんた・・・そんな体でどうする気だい？」
「決まっている・・・けじめを付けに行くだけだ。」
「けじめ？」
「あぁ・・・・」

俺はだるさが残る体を動かして、いつもの服装に着替えた。
そして、自分の魔力量を測って見るといつもの六割程度の魔力しかなかった。
これでは、英雄はフルに使えない・・・陣風を主に使っていくしかなさそうだ。
しかし、ドレインを受けたというのに随分回復が早いな・・・・

「まぁ・・・あんたの好きにするがいいさ。ほら、さっさと出ていきな」
「あぁ・・・ありがとよ、婆さん」

俺はそういって扉を開けて外に出た。
そして、陣風(トレアー)を使って音のする方向へと向かった。

ポーリュシカ視点

「まったく・・・何なんだい!?あの子は!?」
私は空を飛んでいるツムジを見ながら話していた。
昔から何一つ変わっちゃいない・・・昔もふらっとここに来て、風のようにどっかに行っちまった
勝手な小僧だよ・・・まったく。
すると、木の方に一人のフードを被った男が座って家の林檎を食べていた。

「どーりで回復が早いと思ったら・・・あんたの仕業かい?ミストガン?」
「・・・・・」
「勝手に食うんじゃないよ!!」

ミストガンは無言で家の林檎を食い始め、話し始めた。

「風は吹いた・・・巨人も動く、戦争は間もなく終結する」
「あんたも一応マカロフのギルドの一員だろ?とっとと出ていきな、そして勝手に争いでもしてるんだね」

――――――――――――――――バサァ

風がいきなり吹いてミストガンの後ろから複数の旗が空を舞った。
ファントムの旗！？　まさか・・・一人でファントムの支部を潰して回った！？
ミストガンは林檎を食い終わったのか私に近づいてきて、話しかけてきた。
「林檎をもう１つ頂きたい。」
「こんなゴミを置いていく気じゃないだろうね！？」
私はそう言って溜め息をつきながら、再び話を始めた。
「本当・・・あんた達には呆れるよ・・・。強すぎる力は悲しみしか生まない・・・そして、その悲劇の渦の中にいる事を怒りが忘れさせてしまう。」
「私はそれをも包み込む聖なる光を信じたい。すべてを導く聖なる光を・・・・」
「・・・・」
周りの木々たちはこれから起こる厄災を予言するかのように揺れていた・・・
――――――――幽鬼の支配者内部（ファントムロード）
見えない魔法・・・どうすればいいんだ！！
ナツの相棒のハッピーは敵のエレメント４の一人アリアを見ながら

思っていた。

「燃えてきたぞ！！この野郎！！」

「ナツ・・・・・」

「空域・・・絶」

「ぐあああああ！！」

強すぎる・・・これがエレメント４の最強の男・・・

「火竜の咆哮！！」

ナツが必死に魔法で攻撃するがアリアには当たらなかった。

そして、アリアがいつの間にかナツの後ろに立っていた。

「終わりだ火竜（サラマンダー）・・・あなたにもあの男と同じ苦しみを与えてあげよう」

「ど・・・何処だ！！」

「空域・・・“滅”　その魔力は空になる！！」

「やば・・・」

「ナツーーーーー！！」

すると、アリアの顔に蹴りが入ってアリアの体制が崩れナツが助かった。

「エルザ！！」

「・・・・ほう」

「お、おい、大丈夫なのかよ？その怪我？」

「こいつがツムジを・・・・」

「「ひっ！」」

ナツとハッピーは同時に思った。
エルザが切れていると・・・・・
「悲しいな・・・火竜(サラマンダー)の首だけではなく、妖精女王(ティターニア)の首まで私にくれるとは・・・・」
「ツムジに手を出してたのはこの男だな・・・・」
「エルザ・・・・」
「ふふふ・・・流石にエルザが相手となると・・・この私も本気を出さなきゃいけませんな」
アリアはそう言うと目にしていた包帯を取り始めた。
包帯を取った瞬間、アリアの魔力が一気に増大した。
「死の空域・・・“零”発動!! この空域はすべての命を食い尽くす」
「おあああああ!!」
「命を喰う魔法だと?――――――――――――」
アリアの風が部屋の空気を変えた。
ツムジの風とは明らかに違う風、死を予兆するかのような風だった。
「何故そこまで簡単に命を奪えるんだ!!貴様らは!!」
「さぁ楽しもう・・・」
俺がギルドに着くと幽霊兵とギルドのメンバー達が闘っていた。
俺は魔力が惜しいのですぐに敵のギルドへと向かった。
「・・・・少し位手伝ってやるか」

俺は風を操り敵ギルドの足に風を当て、風化させて脆くした。

「カマイタチ――――――」

俺がそう言って軽く風の刃を作り右足に当てると簡単に足が崩壊して、魔道巨人は倒れた。

後ろからの歓声を俺は無視し、急いで中へと入った。

## 幽鬼の支配者襲来！！　その六（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

## 幽鬼の支配者襲来！！　その六

幽鬼の支配者（ファントムロード）の内部ではエルザ・スカーレットと、幽鬼の支配者のエレメント４の一人アリアが闘っていた。

「さぁ、この空域に耐えられるかな？」

アリアは死の風をエルザに向かって、放った。
アリアはこの時、エルザはこの風から逃げられずにやられると確信していた。
しかし、エルザは己の剣でアリアの風を切り裂きながら進んできた。
これに、アリアが驚いたのは言うまでも無い。

「馬鹿な！？空域を切り裂いて・・・」
「――――――――――天輪・繚乱の剣（ブルーメンブラット）！！」
「がふぉっ！！」

そう言ってアリアは地面に倒れこんだ。
ナツ達は驚きの表情でエルザを見ていた。

「ツムジが貴様如きにやられる筈が無い・・・今すぐ、己の武勇伝から抹消しておけ。」

「馬鹿な！？エレメント４が妖精の尻尾（フェアリーテイル）の眉共にやられたというのか！？」

幽鬼の支配者のマスター、マスタージョゼは激昂していた。
それはそうだ、自慢のエレメント４がよりにもよって一番毛嫌いしていた、妖精の尻尾にやられたのだから・・・

「ガジルは何処にいる！？」
「ここにいるよ・・・マスター」

ガジルが返事をしてジョゼに近づいて行く。
そして、ジョゼの前に立つと一人の女の子を置いた。

「ルーシィだと・・・？どうやって」
「滅竜魔道士（ドラゴンスレイヤー）の鼻を甘く見ないでくださいや」

ジョゼはそれを見て不敵に笑った。

「流石は我がギルド最強の男、ガジルさんですね」

「はぁ・・・はぁ・・・」

俺は今、適当に道を進んでいた。
現在は魔法を使わずに進んでいる、正直きつい。
すると、広い部屋についた。

「ここは・・・・？」
「何だよ・・・・アリアにやられたって聞いたのにな。もしかして、ガセネタか？」
「どうやら・・・当たりの道のようだったらしいな。」

俺が見ると、キレイが崩れた岩に座っていた。
キレイは俺に話しかけると、すぐに攻撃を仕掛けてきた。

「そうら、これでもくらいな！！」

黒いオーラが段々と複数の剣に形を変えて襲ってきた。
俺はすぐさま、風を使って盾を作った。
黒い剣は風によって、そのままキレイの方向に跳ね返された。
キレイはそれを下に降りてかわした。

「・・・この程度かよ」
「あぁ？んなわけねぇだろ。それより、随分お疲れのようじゃないか？」
「てめぇに言われたくねぇよ・・・」
「あぁそうだったな」

キレイは俺にやられた右腕を見ながら言った。

「そら、次だぞ！？」
「くっ・・・」

マズイな・・・あいつの方が有利のようだ。それよりもあいつ・・・痛みという物が無いのか？
ここはあいつが接近戦の攻撃の隙を突いて、今出来る最高の技を叩き込むしかねぇな。

俺がそう思っている途端に、キレイが近づいてきて作っていた黒い剣を俺に振りかぶってきた。

「チャンス！！」
「なんだぁ？」
俺はキレイの左腕の手首を掴んで、上へと投げた。
俺は両手で印を結んだ。
「喰らえ！！　翠緑迅（エメラ・バラム）！！」
「ふん・・・」
キレイは笑いながら黒いオーラで盾を作った。
俺の風は黒い盾を容易く貫通してキレイに向かっていった。
「何だと！？」
「終わりだ・・・・」
「ぐぉぉぉぉぉぉお！！」
キレイは俺の風を食らって天上を突き破って何処かに行った。
俺は深く息を吸い込んで、近くにあった石柱にもたれた。
「何とか勝てたか・・・？」
俺はキレイが飛んで行った天上を眺めながら言った。
俺はふっと笑って少し休憩して移動する事にした。
その時、別の部屋ではエルザとマスタージョゼが戦っていた。
「くっ・・・！！」
エルザはジョゼの魔法に捕まっていた。

ジョゼは不適に笑いながら言った。
「時に妖精女王（ティターニア）、妖精の風はどうしているかね？」
「ツムジの事か・・・・」
「あれには、驚かされた・・・六年前に死んだと思っていたのだがね」
ジョゼはそういいながら、エルザにかけてある魔法を強めた。
「う・・・・」
「あのクソ生意気な餓鬼め・・・思い出しただけでもムカつくぜ」
「貴様・・・ツムジに会った事があるのか？」
「あぁ、あるさ。ちょうど、六年前の事だ。
あの時、マカロフと共にマスター同士の定例会があったのだ。
しかし、あの若造、初対面の俺に向かってなんていったと思う？」
「・・・・・」
「答えは――――――――――」
『ちょ、爺さん。俺この人、気に入らないから帰るわ。』
『ツムジ！？ちょっと待つのじゃ！！』
「・・・・」
「あの時ほど、怒りに満ち溢れた事は無い。この手でぶっ潰したいと思っていた」
ジョゼは拳を握り締めて話を続けた。
「おそらく、今はこのギルドの中に居る事だろう。」
「何だと・・・？」

「先程、こちらへ向かってくる風の魔道士が居たらしい。おそらく、妖精の風だろう」
「・・・・」
「貴様達の後は、あのクソ生意気な若造をぶっ潰してやる。」

しかし、ジョゼの話の途中に空から何かが落ちてきた。

「ぐ・・・くそ、またやられた」
「誰だこいつは・・・？」
「おやぁ？　キレイさんじゃありませんか？どうしたんです？その怪我」
「うるせぇ・・・・」

## 幽鬼の支配者襲来！！　その七（前書き）

武士道です。
幽鬼の支配者編、次回で完結します。

## 幽鬼の支配者襲来！！　その七

俺がキレイとの戦いで使った体力の回復を狙って休む事、早二十分・・・・

俺は溜め息を吐きながら休憩していると右側の通路から足音が聞こえてきた。

「ツムジか？」

「じいさん・・・・」

「お主・・・ここで一体――――――――――」

じいさんは俺の様子と、部屋を見渡すと納得したような顔でいった。

「よく頑張った・・・・」

「なぁに・・・まだまだ」

「これ、無茶してはいかん！！」

「何か嫌な魔力を感じるんでな・・・それに――――――――」

「？？？」

「あいつの後始末もあるんでな・・・」

その後、俺とじいさんは途中で別れて進む事にした。

俺が、キレイの後始末。じいさんがジョゼの撃破・・・こんな感じだ。

「ちっ・・・四割って所か？」

四割と言うのは俺の残存魔力のことである。

先ほど、少し休憩したので少しは魔力が戻ってきていた。

「これじゃあ・・・ジョゼとは闘えないな」
俺は自分の魔力を確認し、急いでキレイが吹っ飛んでいった場所へと向かった。

エルザ視点

「何だこいつは・・・？」
「キレイさん？もしや、またやられたのですか？」
「うるせぇ・・・」

キレイ・・・そうだ、私達のギルドを襲った張本人。
この前はツムジと闘ったのではなかったか？

「くそ・・・あの野郎、今度こそぶっ飛ばしてやる！！」
「キレイさ～ん？　その力、程ほどに使ってくださいよ？」
「分かってるさ・・・」
「おい待て！！貴様がキレイか！？」

キレイはゆっくりと私の方へ顔を向けた。

「おぉ？これは、妖精女王（ティターニア）じゃないか。どうした？酷い格好だな？」
「貴様の方が私より酷く見えるが？」
「はは！！確かにそうだな！！」

キレイは高らかに笑うと、左手に黒いオーラのような物を出した。

「まぁいいや。ここで死んでくれや？」

「なっ！？」

「キレイさん？　殺してはいけませんよ？」

「うるせぇなぁ・・・お前の言う事なんか聞いてられるかってんだ！！」

「貴様・・・」

「さぁ・・・死にな！！」

キレイが出したオーラが黒い槍に変わって私に襲い掛かってきた。

「ここまでか・・・・」

私が目を瞑って覚悟を決めたその時、何時までたっても私を黒い槍を貫通する事は無かった。

「あれ・・・・？」

私が再び目を開けるとそこには、ツムジが立っていた。

「ツムジ・・・・？」

「よう・・・エルザ」

ツムジは私の顔を見るとニコッと笑って、再び敵の方に顔を向けた。

「お前もしつこいな・・・・さっさとやられればいいのによ」
「はっ！！　そう簡単にやられてたまるかよ！！　お前だって分かるだろ！？負けたらどうなるか！？」
「・・・・」
「どうせ、貴様も俺と同じさ！！死にたくないから闘うんだろ！？
そりゃそうだよな！？　俺だって死にたくないから闘うし、そのためならどんな犠牲も払う。お前もそう――――――」

ドゴォォォォオン！！とキレイは遠くにある壁へ突っ込んだ・・・
俺が話している途中のキレイの顔を英雄状態で思い切り殴ったからだ。
殴られたキレイは顔を抑えながら言った。

「てめえ・・・・」
「確かに俺も最初はお前と同じだった・・・・だけどなぁ」
「・・・・」
「一度くらい俺にも守りたいものが出来たんだよ。だから、それを邪魔する奴はぶっ飛ばす！！」
「うっ！？」

俺はキレイに向かって突進を開始した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0638w/

転生魔導師　　フェアリーテイルへ

2011年11月16日15時48分発行